『韓和聞書帖（からやまときがきぞうし）』

角書「城州畜生塚／摂州傾城塚」十一冊

天明七年（一七八七）十二月二十三日、道頓堀東の芝居豊竹座　若竹笛躬・丹青堂

※底本に従って表記や改行を行った。文字譜は、とくに必要と思われるもの以外に省略した。

底本：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館（ニ 10-00122）

https://archive.waseda.jp/archive/image-viewer.html?arg={%22subDB_id%22:%2277%22,%22detail_page_id%22:%221;4982%22,%22image_no%22:%221%22,%22kind%22:%220%22}&lang=jp

（1オ）

城州畜生塚／摂州傾城塚　韓和聞書帖　　座元　竹本千太郎

【序詞】殷に三仁有。微子は奴となり比干は戮せられ。箕子
佯狂して邦を去。成湯の礼楽東夷に帰す朝鮮
是なり。太古三つに分れしも今や合せて一人の。風化に靡く
天が下一成宗皇帝の十八年。都を漢の洛陽に比し。宮を
盛唐の華清に准ぶ。王有周の兜を服し。【ヲロシ】玉簾ふかく
座し給へば。干城の良臣李道元。押ならんで安辺の太守世

（1ウ）

留登宇須。威儀には似ざるゝ心の愚蒙。没字牌ともいひつべき。
鼠輩も時に王佐の智恵顔。其外司徒司馬大司寇。錦衣
鼠裘のきらびやか袖をつらねて座に着ば。千條の弱柳青鎖に
垂百澱の流鶯建章をめぐる。治世の春ぞ長閑なれ。李道元
謹で正笏し。建索以来三百年。草もゆるがぬ朝鮮国。八道の名山
大川。屡あやしみを顕はす上。年々釜山海に往来する日本の商ひ
船。一艘も入来らず夙に聞ば彼国の宰相真柴久吉といふ者。我三

（2オ）

韓を侵さん企謀計もれん事を慮り。漁賈賎民の末迄も往来を
とむると云云。予め防禦の備へをなさずんば。禍ひ量なからんと未然に
悟る明智の詞。満堂の官人顔見合せ。一度は感じ一度は恐れをなし眉を
ひそむる其中に。世留登宇須から〳〵と打笑ひ。そふでない〳〵。仁人は天下に
敵なし。我国は中華に續き孔孟を旨とし理学を尊む。況や主上聖
徳まし〳〵。民に忠孝の風俗醇し。何条寇なす者有べき。其上日本
小国の宰相づれ。攻来る供嘸あらん。追退けんに何の手間隙。目に見ぬ

（2ウ）

先に用心は薬の飲置する同然。無益の沙汰と一口に。敵を侮る垣破り。智
恵の奥こそ見へすけり。帝宸襟安からず。今両人が論ずる所。其理なきに
あらずといへ共。猶参列の官人共。各なんぢが志をいへ。朕其中を取べきはと。いとも
かしこき綸命に。堂上道下頭を傾け。只合戦のおこらんを。恐るゝ斗胸に満。身
は冷汗の玉敷庭。奏問〳〵。と声高く。備倭将軍伯英。堰月の矛ふり立勃
然として入来り。ヤァ御大事こそ候へ。日本の賊酋平ノ久吉。朝鮮大明をしたがへん

と。大軍既に釜山海に押渡り。先陣の将加藤正清小西行長。智謀怪力鬼

（3オ）

神のごとく。其勢ひ破竹に似たり。軍に馴ざる三韓人。聞おぢして逃走り。所々の郡縣言がひなく乗とらる。我聞久吉軍法の尖き事。猿の梢をつたふがごとし。賊軍爰に至らん事やはか時日を過すべからず。古公単父が昔にならひ。君王暫らく都を開き。江原道へ移らせ給ひ。守兵の将は世留登宇須。此王城に楯籠防戦術を尽さるべし。又一つには李道元。西大明に援兵を乞。明韓両家の大軍にて。打て登ると聞ならば。正清行長暴なり共。鋭気くじけて忽に逃崩れんはまの辺り。天祖再運開く。知略此上候はじとおめる色なく述たるは。実乱世の

（3ウ）

の英雄なり。ヤア其軍配世留登宇須呑込ぬ。人をば死地に戦はせ。御辺は何国いづれの城。守るか討かそれ聞ん。ホヽヲ孫呉諸葛が軍法も。虚に乗ざれば其功なし。久吉多勢を此地に渡し。筑紫名護屋に陣すれば。将兵西に片寄て東を討に利有。此虚に乗て此伯英。姿をやつし押渡り。五畿七道を攻取ならば。久吉前後に敵を請。勢ひ尽て討死せん。されば国家太平と敵の本国奪いひ取。大功二つ一時に成ん。是両全の謀。我其功をなさん為。用意は斯のごとくぞと。さも花やかに粧ひし。鎧兜を脱捨れば。頭は青き月代に木綿布子の五つ紋一腰しやんと日本の

（4オ）

姿うつせばおのづから。義男備はりいさぎよし。李道元勇みをなし。ホヽヲ出かされたり逋軍慮。末頼もしと感声に日影も斜南殿を早退出の伯英が。お立を告る供触も日本風の声高く。はつと下官がさしかくる。黄羅の衣蓋日に映じ。高麗鉾。弓鏇行列も。千里の船出万乗の。君が門出や二道に。名残を分る。時津風。空定めなき時代なり。永劫し誓も違ふ阿梨那礼の。岸の真砂も星うつり物かはり行三韓の。傾く運ぞ是非もなし。一国の股肱英雄たる文武の兼官李道元。屡軍機に疎からねば。襲ふ和軍のはげしきを。千里の外に防禦の帷幕。漢江の川並に革敷せさしもに。魏々と備へ

（4ウ）

ける。かゝる所へ川筋より。麒麟縣の府使鼈徹。頬髭さつと異相の力者。陣頭に馬乗放し頭を下。されば日本先手の大将小西行長。味方の砦数ヶ所をぬき取。追々是へ押来る体。おしらせ申と手を突は。李道元はほく〳〵黙頭。コリヤく鼈徹。先刻申渡せし通り。士卒に残らず縄をかけ。此所に待伏事を謀れ。ハツア御意畏り候へ共。合点参らぬ貴将の差図。御計略の底仰聞られ下されかし。ホヽ斯斗では不審は尤。抑是三韓国は久しく収まる仁義の文国。聞及ぶ日本は打続きたる戦国。殊には先手の大将加藤正清小西行長。古今無双の勇士と聞けは中々たやすく敵対かたし。此両人に術を以て同士討させ。二虎あらそふて一虎の費へに。

（5オ）

寄手をひしぐ我計略。ハツア逋々関心致した。コリヤく者共。今聞通りの謀計なれば言付ことく合点かと。手下の官人一々に高手小手に禁めたり。李道元は立上り。コリヤく鼈徹。汝は我に随ひ来り。川を渡つて伺ひ計事成就せば相図いたせ猶両岸の大船小船一々残らず焼捨よ。早々来れと纜解越る川波岸向ひ。数多の軍船時の間に一巨の煙のかけ斗。皆ちり〳〵に忍び行。群羊に虎を放つがごとく。当る所に敵なきは刃尖き日本の左先鋒。小西節度使行長。浜手の城々攻落し〳〵。猶奥深く打入事。森の木影は伏勢ならずくゝし上たる下賤の者。コハいぶかしと歩み寄。コリヤく唐人。其方共は何故爰に此有様。有よふに

（5ウ）

申上よ。ハツァ御尋ねに預り答ふるも面目なけれど。我々は此辺りの町人百性。加藤
とやら申日本勢。斯のごとくに禁しめ置。奥深く攻入候と。いふに行長頭を傾け。加藤に
限り。民百性を苦しむる子細なしハテ合点の行ぬ。ハツァいや〳〵左にあらず。正清殿は無慈
悲にて。何にも知ぬ女童も皆殺し。まだ其上に我々共。有徳の家へは乱入させ。金銀衣
服米穀迄。理不尽に乱取忘却。万民歎き此上なし。あはれお慈非にめい〳〵が命お助
下さらば生々世々の御恩ぞと声打揃へ願ひ居る。心得ぬ。日頃加藤が軍令
に打てかへたる取捌き。ヤヽ何にせよ郎等共。皆禁めを赦しくれよ。猶又其者共に兵
（６オ）
粮をあたへ。銀銭十銅つゝ遣し。助けかへせと仁心の捌きに。皆々夢見し心地只伏拝む斗なり
唐人共有がた涙ハツァ重々の御情。此御恩には我々共。日本へ御味方申上。手柄始は三韓の地理。
御案内仕らん。併陣中通路のため。日本の物印御割符。下し置れ候はゞ有がたからんと。願ひに
行長ヲヽ実尤。と差図。にあさひの差物割符取揃。手に渡せば。行長重て。奉仕始は此大川。渉
す浅瀬は。いかに〳〵。ホヽ漢江は三韓に。ならびなき大河なれば。容易越ん渉り瀬なし。併是
より十町斗。上手は水底平かに。岩角もなく水勢ぬるし。いでや瀬踏の試せん。いざゝせ給へと
すゝむれば。つゞけや諸軍と行長が。下知に軍卒勇立皆川上へと。急ぎ行。又も一陣風につれ。
（６ウ）
金鼓の物音駒の足鬨をどつとぞ。作りける。天に四神の宿星有国に四道の弓司。左右の補
翼は龍虎の勢ひ。加藤虎之助正清。人なき国に入ごとく。広州さして乗入らる。ヤアく者共。聞及ん
たる漢江の大河なるぞ。早渉し船は焼捨有ば歩渉しの用意せよ早く。〳〵。と仰せにはつと貴田孫兵衛
御意を返すは恐れ入候へ共。遥に見渡す向ふ川岸。一村竹の藪影に。伏勢と見へ四五十騎。弓
矢携へ備へし体。うかつに渡るは覚束なし。と詞に正清莞爾と笑ひ。ヲヽ実誠去ながら。あれは全く
伏兵ならず。其證拠は両岸に群居る水鳥。さも穏に浮かむ有様。人有人とは思はれず疑
わしくば遠矢にかけよと詞の下。先手の持弓廿騎斗。引しぼつて切て放せば。ねらひ違はず川
（７オ）
向ひ。当る櫂楯物の具も落散跡は藁人形。人々是はと。感じ入加藤は猶も声励まし。
治承の昔田原の忠綱。先陣なせし日本の宇治川より遥増りし大河なれど。何条渡さて置べ
きぞ。いさめや諸軍と下知につれ。我も〳〵と諸軍勢。騎馬武者歩立手を取組。ゑい〳〵
声にて相渡すは目覚しくも又ゆゝしけれ。孫兵衛先にかけ上り。以前の伏兵藁人形かなぐり〳〵。
コリヤコレ小西殿の手勢の割符。スリヤ相役の手柄をそねみ。君に不覚を取せん為。抜がけせし未
練の仕業。船を焼しも行長の所為成か。シヤにつくき振廻やと。罵る孫兵衛騒がぬ大将。ヤア
それにこそ子細ぞ有ん。小西程の仁義の勇士。左様の麁忽阿利べからず。アイヤく左に候はず。マヒ
（７ウ）
御覧候へ。見へ渡る山手の城々。いづれも立し籏印は。行長殿の家の差物。早抜がけに相違なし
と。いふにさしもの正清も。シヤ比怯成毛二才め。惣大将の下知にも違ひ。軍令を背く不法の
行跡。奇怪至極と遉の大勇心外。面に顕はして。者共つゞけと足早に山に手さして。
急がるゝ。木影をぬつと鼈徹が。相図と見へて喇叭のごとき。入子の長筒引出し〳〵。咡く一
声谷間にこたへ。手に取ごとく聞ゆる大声。大将帰去来謀略なんぬと。ひゞく相図に馳来る
道元。様子はいかに何と〳〵。まんまと首尾よふ二人の大将。ヲヽ出かしたり連々。ヤアく両人の家来馬
引やつと。声もはげしき猛将明智。威風りん〳〵。諸轡。白あはふかせ両人が打合ふ角々文津秘
（８オ）
術の鞭霞を蹴立【三重】行末は
二冊目

車轔々馬蕭々。行人弓箭各在腰。耶孃。妻子走相送塵埃不。見咸陽橋。
絲竹の音や鬨の声。山も崩るゝ乱調の中にも遺王城の御苑は今を時めきし。牡丹台とて
目かれなき。花に嵐の外とては。世の憂知ぬ皇太子御二方を傅きの。官人侍女が取々に物騒がし
き貝鐘を。わざと紛らす伎楽の御遊。喇叭ちやるめら口々に御機嫌とり〴〵賑はしき。傍に姉
宮おとなしく。手習ふ大字の筆差置よふ〳〵お上手名人様と。そやし給へば付々もほんに殊なふ御
上達。臣等は中々及びませぬと。誉る詞に弟の宮。イヤノフそち達が拍子よふはやしてくるで。
（８ウ）
丸も面白ひ舞て居たれど。何やら遠いひ騒がしい物音がする故に。恟りして拍子を忘れる。
衛府の者に申付止させよ早ふ〳〵。ヲ、乙の宮の宣ふ通り。けしからぬ金鼓の物音。聞たび
〳〵に胸騒し。手がふるふて物が書れぬ。アリヤまあ何の音成ぞと。尋ねにハット李道元。
コハ詔去事なれど。アノ仰々敷聞へますは。アリヤナニ。ヲ、それ〳〵。父君の勅諚にて。山東の谷々虎
狩の真最中。それ故列卒の大勢矢叫びを仕る。ノフ桃李君そふではおりないかと。くろ
め兼たる目まぜに黙頭。ヲ、成程〳〵。李道元殿申されます通り。獣狩なれば
追付虎の生捕を取寄まして。御覧に入させます間。先それ迄は。やはり今の様にお舞
（９オ）
遊はしませ。イヤ〳〵其様な剛い物は見とふない。どふぞ父帝様へ御詫申。早ふ物音をやめさせて
くれいやい。丸はとも有母様の御病気。お耳にさはらば悪かりなん。早々遣ひを立てくれよと。
まだいはけなき心にも。孝心厚き御詞。二人は顔を見合せて。思はじぬるゝ袖袂。暫ししほれ
て居たりしが。桃李君差寄て。ヲ、おやさしい今のお詞そこへ心が付ませなんだ。最前より
御見舞も遠ざかりましたれば。私は御病架へ。イヤく母様へのお見舞ならばわしらも願ふ。今清
書仕た此篆字。次手にお目にかけてこふ。乙姫もサアお出。サアく早ふと先に立。進給へば
是非なくも御両所。伴ひ入にける。李道元は茫然と。拱く手よりも手詰の軍。心いた
（９ウ）
むる折も折。みぎりに立たる茂みの樹木。かつきと立は。コハ矢文いかにと抜取読文体。ムヽウ
扨は。急て間者に申付。合体仕たる日本の諸侯北条氏政が手下より内通の此一書。世留登宇須
と某が兼て謀りし計略に寄て加藤正清小西行長。早確執と成たるとや面白し
〳〵。猶又何角申合せの使として。究竟の士卒両人を撰。王城へ入込せん去ながら。味
方の見る目憚り有ば。北狄の使とやつし差越ん。委細の手筈ぬかりなく計らふべし。若疑念
も有んと。先達て渡し越れたる勘合所持させ申べし。万事使者に申付候頓首。ホヽとく
より仕込し我手筈快し〳〵。先達て平壌へ。聞かせ給ふ大王も。程なく還幸なし
（１０オ）
申さん。ハヽ、悦ばしやと。勇む心も奥の亭楼閣深く入にける。後宮の軒端もれくる
月影も。独片敷袖袂。錦夫人は只ならぬ病ふの床にまして猶。君の別れに伏沈。世姉阿
監にいざなはれ。輦ならぬ肩車。花見車も力なく。未央の亭に入御なれば。桃李君
傍近く。イヤ申夫人様。今朝程より御伺ひも申上ず。御服薬でも遊ばせしかと。申上れば錦
夫人。ヲ、いつ迚も並々ならぬそなたの介抱。よも此上の有べきか。此頃招きし大明の名医
が配剤。次第に見ゆる薬の験。必案じて下さるな。それに付ても此度は思ひ計らぬ
軍始り。誰しもかはらぬ心遣ひ。帝様にも。早平壌とやらへ行幸とや。折悪ふそな
（１０ウ）
たの夫伯英は他国。力に思ふはそなた一人。二人の皇子が身の上迄。必よきに頼むぞやと。
悩みの中にも御親子の。心遣ひぞやるせなき。桃李も心根察しやり。コレハく冥加
ない御詞。夫国遠致せしもやはり和軍を退治の術たとへ夫は有合さず共。忠臣無二

の李道元。御傍に居るゝからは。国家の守護はゆるがぬ礎。そつ共気遣ひござりませぬ。最早今度の合戦も十が九つ味方の御利運。追付目出たふ万歳を唱へませふ。御心確に一日も早いふ御快気なされ下されませと。夫人が胸も家国の末の末迄おもひやり。力付たる利発さは。実伯英が妻女なる。時に官人罷出。北狄の大王より御加勢を申

（１１オ）

さん由の此書付を差出し。物を申さず異相の両人。罷通る故御知せと。申上れば。ハテ心得ぬよしみもなき外国の使。何にもせよ心あらき夷の臣下。御前へ出すは憚り有。風もあらばあしかりなん暫しと枕差そゆれば。こしもと婢か取々に帷張まぶかに引まとふ。桃李は侍女に打向ひイヤノヲ夜昼の看病に。そなた衆も嘸草臥。御傍には自がとのゐして居ませふ。暫しの間は次の間で。休息仕やと末々迄。いたはる詞に打悦び皆々次へ入にける。待間程なく入来る。あやしの虎の皮衣頭に蒙る猩毛巾。辞義も作法もあら夷。庭上に居ならばは。奥の台より李道玄。歩み出て座に直り。ヲ、遠境の使者大義〳〵と。詞に両人無言の揖礼。懐中より勘合取出し。

（１１ウ）

見すればこんたはとつくと改め。ホ、疑ふ方なき北条氏政が間者。サ、苦しうない打とけ召れと。いふに両人居直つて。着たる装束かなぐり捨れば。下はきらめく日本姿。遥下つて。頭を下。某事は木村作右衛門月の輪典膳とて。氏政か随身の衆等。向後御見知下されかし。扨主人申付まするは。兼々文通に申せし通り。三韓国へ一味の条。相図を待請け陣中より裏切を仕らん。御国利運に相成上は。百済一国譲り下されんとの御契約。又反間の謀を以て加藤小西の両将をも。勝手知ぬ深山大河へおびき入申べし。猶も城内密事のあらまし拙者共へ仰聞られ下されなば。他事なく御味方申上んと口上あら〳〵斯の通りとのべにける。ハ、ア遖健気の氏政殿。

（１２オ）

いよ〳〵先頃約諾の通り。ム、すりや御書面に相違なく。ヲ、サ三韓人は虚言ござらぬと。請つかへしつ問答に。桃李君は不審顔。北狄の加勢と有に。心得ぬ和言。ヒシさどふした事でござります。ホ、ヲ様子知ねば不審尤。某と世留登宇須。兼て日本の諸侯たる。北条氏政に合体し数度の文通。是といふも此国を久吉に。味〳〵と奪はれまじき計略と。いふに扨はと落付桃李。後は更に密々を。しめし合たる折も有。遥に聞ゆる攻太鼓雲もつんざく矢声につれて。御注進〳〵と。呼はりかしこに手を突ば。ヤア汝が五音心元なし。軍の様子いかに〳〵。ハッア御尋ね迄も候はじ。験岨を頼みの鳥嶺には。名にあふ勇士徐元礼。金海の符使朴泓始め。要害堅固に楯籠。

（１２ウ）

日本勢の先手の大将。小西行長かけ向ひ無二無三に攻かけ〳〵。射かくる矢先は雨あられ。しのを乱して戦ひしが。運の極めか一戦に。シイ声高し。シテ其跡は。しづかに〳〵。ヲ、くソレく。爰は御寝所程近し。ナソレ合点かと心を配る二人が気づかひ。コリヤく阿暮主鈍。定めて寄手は皆殺し。ナ。ヰ味方の勝利か。イヤサ其義は。ハテ扨。勝利で有ふがなと。指さす仕形に呑込阿暮主鈍。成程成程〳〵。さしも剛成味方の軍卒。僅の敵に切立られ。立足もなく皆ちり〳〵。シイ。無念〳〵と大将元礼。漸残党かり■め。防き戦ひ候内。何所よりかは忍びけん。味方の陣屋所々。火をかけ放ち候へば。時の間に黒煙り。シイ。さらへ消さんも水の手は。元より少なき

（１３オ）

山城の成はせん方つきて大将始め。城中残らずあへなくも。イヤサ勝鬨上たで有ふがナ。イヤハヤ夫は。イヤサ。勝じや〳〵。敵は残らず討死せふが。そふで有ふ〳〵。サアそふか〳〵と両人か。目頭て知せは阿暮主鈍。イヤハヤ成程御意の通り。十分勝鬨勝軍猶も跡の手気遣ひと。追手の方へ引返す。李道玄は小声に成。今の注進聞上は。早王城へ乗り入んは必条。何卒夫人に敗北の様子を隠し。御遊の体にて御車に乗

西京迄御供召れといふに桃李はさし心得。裾小短かく一刀かい込。そんならお前は太子様。宜しく頼むと言捨て。供奉の用意と走り行く。先一方は片付た。コレく両人。其方達は以前の

（１３ウ）

如く外国の姿其侭に。当城の助力頼入何が扨〳〵。ヶ様の時の加勢の役目。御心置なふ何成共と。又引かぶる始めの装束。コレくく和殿は二人の王子を伴ひ。咸鏡道へ共して呉やれ。又一人は宝蔵なる。封国の印の守護頼入。ソレと投出す蔵の鍵。心得両人打連て。後殿さして入にける。李道玄は道ぜするゑせ者。たとへ一旦敗るゝ共。勝利となさんは今の内。いでや一当防戦の。用意せはやと打立折から。日本の御使者ぞふと呼はるにそ。ハテ心得ぬ。干才の中に和軍の使いかなる者ぞと躊躇ふ内。戦場の姿引かへて。長袴の裾ふみしたき。和国の礼義凛然と。入来る小西行長。儲のせきに打通れば。李道玄謹んて

（１４オ）

国に犯せる罪なけれど。天の憎める三韓の微運。斯王城も大軍に囲まれ落城正に目のあたり。身を陣頭の刃に擲。名を後代に残さんと存ずる所。思ひよらざる貴将の入来。事訝しと尋ぬれば。ホヽヲ不審尤。そも此度の軍といつぱ。隣国のよしみを空しく絶せし故。両国の争論斯半ば乱入せし上は。一箇の武辺は早足ぬ。今にしも王城を明渡し。元の如くに従ひ給はゝ。長く日本の属国となし申さんが。但しは勝負を決せんや又は降参せらるゝや。所存いかにと詰かくる。物をもいはず李道玄。ずんと立て砌なる。牡丹の一本折取て小西が前に置。一国の返事。此過

（１４ウ）

ずと座に直る。ホヽしほらしき花の返答。此花をさして。花の司花の富貴に上なき迚。花王と世には称ずれ共。日本もは用ひぬ王号。此三かんも今大明の属国となり明より受し封国を。日本の主高冨家へ捧んと有花の返事。聞届しが所存が違ふ。抑高冨久吉公。普く日本を随へしは。人力ならぬ名誉の大将。其勲功を大明より恩賞に預かるべきや。又三韓を切取共。是又明より受る義はなし。そりや唐帝の号せし花の王たる牡丹の一輪。高冨家に所望にござらぬ。自然と極る花の皇。和朝に限るいさほしの。花は桜木日本の武勇の大将。畜生国の封

（１５オ）

は請ぬ。ひかへ召れと大度の一言。ヤア舌長なり小西行長。小国辺地の日本なれど。古今のよしみ有ばこそ。和順に事をはからへば付上たる今の一言。使たるを戮する法なけれど。事に寄たら生ては得こそ返すまじ。覚悟せよやと身繕ひ。ハヽヽ其昔神功皇后にせいやくを立。長く日本に随ふべきに。ちかひをそむく重々のふとゞき。夫のみならず汝ら胸に覚有工みの一々。引とらへて白状させんは安けれ共。早大軍にて攻落し縛り首打汝に論は無益。程は有まし待てゐよ。ヲヽ手の下に有其方が一命。助かへすは陣中の礼義。戦場において用捨はないぞ。ヲヽいふにや及ふと。白眼合ひ。出行

（１５ウ）

小西が前後。覚への力者穂先の透間あらせず取かこむを。見かへりもせずのつか〳〵。歩む小西が大胆不敵本陣さして立帰る。跡見送つてヤアく鼈徹。只今の使者小西行長。門外にて討て捨よ。早く〳〵の声の下。ハット答へて剛気の鼈徹。望む相人の大将軍。

■こそ行し討取ん。者共つゞけと早足に。跡をしとふて駆り行。ヨシ心地よし〳〵思はず手に入一方の大将。此上は加藤一人。討取手立は手裏に有と。独黙頭く折も折又も烈しき責太鼓。アラ心得ず気遣し。かけ向はんと折立広庭そなたの一間に大声上。日本先手の大将。加藤正清見参せんと呼はる声にちつ共動せず。ヲヽ願ふ所の虎之助小西と

（１６オ）
共に首をならべる。そこ動くなと詰寄れば。ｼヤ小ざかしき其広言。おのれよく謀計
を以て我々に。同士打させんと工みしな。早かく迄にのり入たれば。遁れは有まい降
参せよ。ヤア愚や正清。たとへ此一城はのつとらる共。刃の下にうぬらが首。ならべぬ内
はいつかな〳〵。ｽﾘﾔｹ程迄かこまれても。降参する所存はないか。おんでもない事。ヤアく
正清か家来鵤九郎堀本覚兵衛。めい〳〵守護する宝の印。人質共是へもて。
はつと答へて二人の間者。王子いざなひ立出れば。ヤアくくｽﾘﾔ氏政が家来とは偽よな。
ヲ、広州へ来る道にて。氏政へ内通のそちが使を切殺し。手に入た勘合から。間
（１６ウ）
者と成て来たとも知らず。ふか〳〵渡した宝蔵の鍵。ヲ、王子の供奉までうま〳〵と。
手もむらさずして手に入二品。何と肝がつぶれるかと。重なる不覚に李道玄。
無念〳〵と髪逆立。物狂しく見へたる所へ息をはかりに桃李君。転つまろひつ立
もどり。のふ申。仰を蒙り夫人様。裏門より供奉する道。情なや日本勢貴田孫兵衛
とやら武士にやみ〳〵奪ひ取られし故。直に自害と思へ共。お知らせ申さんばつかり
に。おめ〳〵と帰りしと。聞より扨はと李道玄。拳しを握りじだんだ踏み。ェ、かれと言是と
いひ。斯迄武運に尽たるものか。日本人は思慮深しと聞たれど。何程の事有んと。
（１７オ）
及ばぬ智恵立我計略。計る〳〵と思ひしも却て。うぬらにはかられしか。ェ、是非もなや口惜やと。ま
じりもあけに張さく涙。もふ是迄と正清目がけ。剣抜持て飛かるを。どつこいそふはとは鵤。九郎が
手練の槍かいくゞり。受流しつ入身の打太刀。程よく鵤突出す穂先鎧のすき間へ突込だり。ｲｻﾞ
首取んとかけ寄堀本。正清暫しと押留め。ホ、ヲ敵ながらも天晴忠臣。刃の下にも操を忘れす。義臣を
守る丈夫の魂。感せし余り一通り言聞せん。苦痛をこらへ能く聞。かく謀計にて奪ひ取たる封国の印。
今其方が忠節にめんじ。とく〳〵かへしあたふる間。二度義兵の石ずへともならばせよ。此方に有て益なき
宝。些細な事をおとりにして。戦ひなす日本ならず。二人の王子もまつ其如く。一旦我手へ預かるといへ共。久
吉公へ
（１７ウ）
実験にそなへし上。時節を待てかへしてくれん。元より仇有国敵ならねば。擒を殺さんいわれなし。必気遣ひ
致すなと。仁有勇有正清が。詞に道玄思はず低頭〳〵誤つたり〳〵。日本人は勇猛にて。仁義を知ぬ
と思ひの外。今の一言聞上は。仇も怨にもさら〳〵なし。去ながら。情は情義臣は義臣。たとへ泰山は前に崩るゝ
共。我存念いはいつかな変せぬ。ホ、ヲ死に望んでも義を忘ぬ誠の英雄。いでや冥途の餞別せんと
辺りにひらめく旌旗の大はた。立しながらに有合ふ大筆。仁義もふくむ墨くろ〳〵。八符の筆点
あざやかに。清の一字を書付たる。ｺﾚ見られよ李道玄。此正清ヶ清の一字記したるは義によつて
暫く預かる王子の助命。偽りならぬ誓紙の一字。是を未来の土産となし。成仏せよと手に渡せば。
（１８オ）
ﾊｯｱ重る厚情忘れは致しと。押いたゝき〳〵疵口より。引出す臓腑紅に。染なす文字李道玄が道
の字を同しく隷書に書付たり。ｺﾊ見給へ正清公。我張つめし強勢も。和殿が仁義にひしがれて。何と
刃向ふ剣はなし。しかし表はいつかな変ぜぬ。ｺﾚく桃李。おぬしは我に成かはり。封国の此御印。再び
手に入腮の賜。此籏諸共我討死。帝へ具に奏しくりやれ。早大明の援兵来らば。両朝
一手の大軍にて。勝負は天に任する戦ひ。若運尽し其時に。降参するとも和を乞ふ共。此
籏をもつて押立なば。やはか日本の陣中に敵する者はよもあらじ。再び和らく和かんのよしみ。
彼軍門に曝たる。呉子胥が服は違ふ共。我分石の義は朽じと。末の末迄。見通す詞。ホ、ウ
（１８ウ）

さすが一国の補佐の臣。未然を察する最期の一句。そちが存念立させんは。末代日本へ来朝の時必其籏真先に。押立渡らすべしと。勇士の詞は末の代に残る方なき加藤が情。今にたへせず朝鮮人。先手に立る清道の。籏のいわれぞ隠れなき。痛手も屈せず李道玄。イザ桃李君。そなたは帝へ二品共。早く〳〵とすゝむれと。ふり捨かたき主従三世。二人の王子によそながら。見かはす名残足もそら。平壌さして出て行。ハヽア今こそ思ひ置事なしと。剣の鋒四五寸くわへ。砌の石より真うつぶせ。どうど倒れて死したるは。天晴義者の最期なり。ヤアく者共。早王城は乗取たれば。二人の王子の守護いたせ。心しづかに殿せんと打立所へ。取てかへす鼈徹が。手

（１９オ）

勢引具し馳戻り。ヤア逃足早い小西行長。取逃せしを残念に思ひしが。望む所の加藤正清。爰に残るは天明の突殺さんず覚悟せよと。ひらめく蛇鋒の八尺斗。正清目かけ突かくる。心得さそく庭前の。桂の大木クェイウンと。引抜大力当るを幸い。ばらり〳〵と【三重】薙廻り。程よく長槍打落し。大木なげ捨むんずと組。たがひにいどむ互角の力。されども勝りし加藤が勇力。ついに組敷膝の下。はね起さんと身をもむ鼈徹。おこしも立ず諸手をかけ。首をふつつと捻切て。むらかる中へ投付れは。ソリャこそ鬼よ舎丸〳〵。武音〳〵と唐人共皆ちりぐと逃失たり。最早追付敵もなし。いで凱陣の粧ひも。

（１９ウ）

濃紅の牡丹台。花の王者の金殿も。踏あらしたる神国の。弓矢の東莱。全羅道敵は。熊川味方は又。あぼす峠の絶頂に揚る。誉はかんばしきかゞなみ目ばしき釜山海。鬼上官迚唐土に。嬰児も啼をとゞめたる。勇者の昔今爰に。語るも。ゆゝしかり【三重】ける次第なり

第三

咲草の三つ四つ葉も数忝し。桃山御所の御殿珠玉をのべし物好は。宜も豊に冨家の栄行。御代そ類なき在番の諸侯盛尾内膳高山玄蕃。心の佞悪を素襖の袖に押隠しいかつかましく立出れば。廊下口より大館軍蔵。立帰つて手をつかへ。ハツアコレハくよい所へ御両所様。某事は

（２０オ）

主人北条氏政公の仰を蒙り。先達て聚楽へ立越万事の手つかひ仕。只今帰り候と。いふに両人太義〳〵。イヤハヤ万事抜目なき氏政公。哥の御会と偽つて曙御前常盤之助。とくよりつりよせ置たれは兼ての大望今此時。三韓国の内通といひ。成程〳〵。殊には又久次を罪に取て落さん計略。事成就せば大老職。イカサマ拙者も御吹挙にて。日頃所望の俄大名。ハヽヽ。うまい〳〵と密談半。襖押明北条氏政。ヤア仮初ならぬ逆意の内談奥には曙常盤之助。高声は不遠慮〳〵。シテ軍蔵は。ハツア御意に随ひ何角の計略。上意こかしでやり付たれは。追々是へ参る手筈。また其外に拙者か働き。大領を調伏とて北野天満宮へ奉納有し。久次が自筆の願書。人知れず

（２０ウ）

奪ひ取。密に手に入奉る。ヲ遖手柄出来た〳〵。是さへ有は願成就。猶其方は三韓へ片時も早く発足用意。御両所はぬかりなく。久次か讒言我君へよそながら。後詰の思案は此願書。宇治殿の御目にかけ。急々仕込だ細工の仕上。ヲヽ面白しく。然らば後程。万事は後刻〳〵。と高山森尾。皆々打連奥に入。異木よりおくれて咲る初花はまたき盛りの宇治の方。釣簾もれ出る月の眉。おはし。ま近く立出給へは。氏政わさと謹んで。コレハく宇治の御方。御身かろけにお成の粧ひ。麗はしき御尊容恐悦至極とのべければ。ヲヽ怠りあらぬ日毎の出勤。君にも久々筑紫の出陣。此頃の御帰館に久丸の愛盛り。殊のふ御機嫌うるはしけれは。猶此上も

（２１オ）

着が先生。一向宜しう頼むぞと。自愛も厚き御詞。ハツアコハ改まりし御仰。御頼候はずとも

主君の公達。去ながら改申に及ばね共。我君大領久吉公粉骨砕身遊ばされ。平均なさ
れし六十余州。むざ〜他人に譲りあたへ。内身たる久丸君。臣下同然となし奉るは。ァ、近頃残念
千万と。邪知を隠して仕かける讒言。宇治の方あやしみ給ひ。ハテいわれざるそあたの一言。久次公へ
関白職を譲り給ふは。忝くも帝の綸命。元より御養子とはいひなから。外ならぬ政所の
御甥君。譬殿下は久次公へ御譲り有ても。久丸には大国数所宛行はんず君のお心。ハ、、サ
それが即女義の浅はか。譬日本国中御譲り有ても高が大名。久次公の代ならば。普く諸
（２１ウ）
侯は殿下の家来。大領みしも御他界有らば御幼君を取伝押込。猶理不尽のふるまひ
有共殿下の職なりや手差はならぬ其上此頃大者の段々。多くの妾を召抱昼夜
酒色に魂奪はれ。放埒不道の御身持。誰いふとなく国家の乱。とサ人を以ていはしむる
天の冥罰。イヤくく。ソリャ證跡もなき偽り表裏。さかしら事の噂は無用。イヤサ何ぼう道立な
されても。いつおふいはれぬ證■の此品。御父君を調伏の。自筆は遁れぬ呪詛の願書。サ
是ても逆意てござらぬかと。かさにかゝつて腰押侫奸。差付られて宇治の方。否むも
さすが女気のやゝ御いらへもなかりしが。ム、スリャ世の取沙汰に違ひなふ。奢りと見せて逆意の
（２２オ）
風悦。ヲ、サおふわん為と知たる故。曙常盤諸共に君の御諚と偽つて。一々に引とらへ。サァ事の実否
を糾明し誠野心に極まらば。人質とせん我計略。ホイそふ有からは此由を具さに君へ申上ん。ヵ
もし久次に怨有野心の者の所為ならんも計れず。善悪二つを糺した上。イ、やまた〳〵と。手の
びにならぬ国家の大事。こなたの手際にや覚束なひ。其直に言上せん。イサこなたへと
引立さもあらけなく打つれ入。奥は御遊の声ならでやゝ澄わたる時斗の音。胸へ■ふる常盤之助。君の不
審の言訳もいらと女間を出。合点の行ぬ今日の御召。ハテ心ならずと手を拱き思案にくるゝ広庭へ形も。所
体も御所風に色としるき紅井か。アイとなさんそ御頼申ます。聚楽様の御付合ひ。三浦様迄此文箱。御取次を
（２２ウ）
といふ声に。ヤア太夫か。心得ぬ形てぶり。思ひがけなひけふの時宜。御門をどふして通りやつた。コレ時さま爰
へ来
たのかふしぎかへ。とんと廓へこざんせず。ほんに幾瀬の憂案し。けふ爰へこざんしたと聞たを便幸と。妙衆に
紛
れて来た。ァ、嬉しやと寄そへは。ハレめつそふな。爰をまあどこじやと思ふて居るぞいの。殊に大事の御供先。
見付
られては互の身の上。ホンニわがみも推に似合ぬ。ちとたしなんたがよいわいの。早へいにや〳〵。サァくちやつ
とゝせり
立れは。ェ、そりやあんまりしや常盤様。そもや勤の始よりとふで此身の行末は。誰肌ふれん紅か。あかぬ其訳は
まぼろに見へつ。隠つ恋忍ふ。わしか心を知ながら。問音信もさしやんせぬ。憎い心と取付て。恨み涙の数
々は。花の盛りのおのが名に露をたもちし風情なり。ヲ、其恨は尤なれと。此頃御所にも何やらかやら穏。なら
（２３オ）
ぬ御用筋。事繁ければ使もならずいひかはした二人が中。何の心がかはらふぞ。吐しもたんと有けれど。とかふ
いふ内人
目の関。そんなら幸溜りの間。ちよつと〳〵と手を取ば。ァ、太夫やくたいもない。イェく隙取事じやなし。是非
に〳〵と
すゝめられいなには有ぬ稲船の。棹の雫の濡次手。こぼれ安くも打連行。程なくざはめく裏御門。しと
〳〵歩む鋲乗物。若党仲間声々に。誰お取次頼入。お部屋方の御入と。呼はる声に大館軍蔵。ヲ、それ
待兼しいづれも大義。御乗物を奥庭へ。心得下部が飛石つたい。追々送る前戴に巻数凡三十二挺手

ぐりに。かしこへかき入れば。ｻｱしてやつたと軍蔵は表口へと出て行。心も空に常盤之助紅井諸共かしこに出。ﾊﾃいぶかしき館のありさま。外はともあれ御台の安否。心もとなや気遣ひと。うろ〳〵

（２３ウ）

見廻す奥の方。曙御前を襠の。裾に忍ばせ出くる宇治君。始終は最前見届し其女こそ幸屈竟讒者のはびこる此館。召寄られし女中達。皆氏政が計ひなれば。暫時も油断成がたし。殊に大事は曙様。世の常ならぬ御懐胎必凶事のないよふに。一先此場を扨こそ〳〵。然らば此まく我館へ。ｲﾔく都は気遣ひな。いづくに成共人知れす御供申が忠義の一つ。幸女のよい道連早く〳〵と情の詞。常盤夫婦が気は早鐘。尽ぬ名残とかひ〳〵敷。御台誘ひ。落て行。ｲﾃ此上は御前の安否。捨置がたき一大事と。胸を定めて入給ふ。稍時うつる奥の間より。何か白木の箱たづさへ。伺ひ出北条氏政。まんまと首尾よふ久次が悪逆。一々言上せし所

（２４オ）

案に違はず憤り。使者を以て事を糺し。誠野心に極まらば。箱に納し此狼煙。上を相図に大軍にて。聚楽へ討手を遣す手筈。召寄置たる女ばら。残らず死罪と火急の諚意。日比の大願達する時節。ﾊ、、、心よし〳〵。幸使いは森尾高山。早く〳〵の声につれ。馬上りゝしく広庭へ。くつばみ揃へ乗出す馬は名にあふ連銭あし毛。真一文にかけ飛はす。待た。〳〵と声高く。裾小短く襠の。たけ抜群の大女房。貴田孫兵衛か妻お園。おめる気なく立ふさかり。ﾏｱく待て下さりませ。ｹ様な御用も有んかと。寄生御前の名代に。陪臣なから孫兵衛の妻。待かふけたる此お使。憚りながら此園へ仰付られ下されなば。ｬｱならぬ〳〵。なま

（２４ウ）

ぬるこい女の使者。人もなげなるはつ才めらう。ﾖ、ｻ此両人を乗こへて。使ひを望む頬魂。そこ立去ずは蹄にかけふや。ﾎ、ﾃﾓ仰山なおつしやり様。女と侮る其お詞。姫こせならば此お使。もしならぬとの御上意かな。ｬｱ何を女の小ざかしい。久次逆意に極まらば。ﾖ、ｻく使者は忽討人の役人。ﾑ、其討人面白い。弥逆意に極まらば。さゝゆるやくばら人つぶて。関白様でもどなたでも。用捨は赦さぬ私が手練。望みかゝつた金輪際。ｲｬちこざいなと駆出両人。どつこいそふはと雪の手に。しつかと取たる二つの尾筒。ｴｲ〳〵と。引もどされ。二人はいらつて打込鐙。馬は別足蹄の力。あをれどさかに那羅闍力須弥の。■の金剛手おのれとつなげるごとくなり。

（２５オ）

ｴｲとかけ声引戻され馬は小躍つでんどう。面白砂にまぶれる両人。ﾖ、逋大力奇代の園感ぜし余り此使改そちへ申付ると。立出給ふ宇治君の仰に氏政案の外。ｴ、手ぬるし〳〵去ながら。使者はめらうが立にもせよ討手の副将其両人。相図を待て館を取まけ。いそふれやつと北条が詞に浮立高山森尾。いさむお園は此場の面目。役目も晴の襠に。勇気か、やく綾錦聚楽の御所へと【三重】出て行

第四

金を塊とし玉を礫に打集。聚楽の御所は道楽のはきためと成ちりや。たうりら三番叟。始る時刻は日の出汐。波の鼓もうつり気に。思ひ出次第臨時のお能。拝見仰付られて狂言よりは一家中しびり。切かして相語る。

（２５ウ）

道成寺は殿のお能。手明の太夫ワキ仕の銘々。御楽屋に寄たかり。何と仙助殿。どふ思ひしやる。何ぼう能役者なれば迚。我々ｹ様に年が年中。まい〳〵と舞くらす因果も有。又関白様のやうに。夜も昼も面白い事仕次第に。遊び暮さつしやる果報も有。ﾊﾃ扨述懐いふまい。世は皆廻り持しやわいの。ｲｬ何ぼう廻り持でもこちとらに廻しはせまい。ｲｬ廻すそや。殿様の稽古にはいつでもほつとして

目を舞す事じやて。ｺﾚ今道成るをやつてござるか。すつぱりといこふかの。ｲｬ何でいくものて。常〳〵

の稽古にも師は弟子を敬ひ。弟子は師を侮り。コリヤヤイ爰の所はこふか。味能ふ教おれ。と
にらまれ。ハイ〳〵左様でござりますと。悪ふても能にして置事じや物。何でよろかふ筈がない。
（２６オ）
定て舞々こつがうで有ふものをと仇口々。のさばり出たる大嶋武兵太。ヤイくさはがしい高笑ひは
雑談か。イヤ邯鄲でござります。何ぬかす。今は道成寺定て殿がおでかしなさりよう。我
等は又殺生石で当て見せう。併ちよとさらへて置ふ。切の所を声低に謡ふて呉いと立
直れは。頬ふくらして仙介は。ふせうぶせうに地謡を。野次野の原に顕れ出しを狩人の。追つさ
くうつさくりにつけて。矢の下に射伏られて。即時に命を徒に。イェくそふでないコレよふごらふじま
せ矢の下に。射伏られと。斯そり返るのじや。ヲヽ呑込だと仕て見ても兎角武兵太すへた
の拍子。ばた付足音御大将面がつらをかなぐり捨。楽屋に馳入給ふにぞ。跡からおづ〳〵囃子方。
（２６ウ）
脇仕地謡こは〳〵ながら。御機嫌の胸窺へは。ヤイおのれ原。太鼓鼓も打損。当惑させしは不届
やつと。きめ付られても芸者気質。イヤ憚りながら只今の所殿様のお謡がと。いふを傍から
打消す武兵太。ヤイ〳〵詞を返す慮外物。一々首のとぶやつなれど。御慈悲の上閉門仰付らるゝ。立て
うせうとしかられて。みす〳〵君の仕損でも。仰られには詮方も。投首してぞ退きける。取次
有て入来るは。御よしみの高家方。高階入間両家の使者。はるかこなたに手をつかへ。中将友
実が家来鳴海蔵人。少将道定が家来象方内匠。我々が主人申越候は。此方の姫共達て
御所望に寄。差出置とはいへ共。ちと存る子細有ば。何卒御返下されたしと。聞もあへず最上
（２７オ）
監物。ヤァ思ひかけない寝耳の水。入間高階両家の御使。イヤハヤ悪い了簡。誰有ふ我君の思召に入
たればこそ。栄花に暮す姫達。其引かけで活計をやらるゝかうは。公家もうけに入て居る仕
合ならずや。其に跡返さんなんどとは。貧乏公家のやせぢかりと嘲弄すればせき切両人。時世の
浮沈は有ならい。暫く官位下劣に有共。誉有両家の娘。当御所へこそ参らせたれ。桃山へ
の人質に出し申さぬ。ヤァ人質とは何が何と。今日哥の御会なりとて御台所を始。三十余人
のお妾方を。桃山の御所へ召れしは。久次公に御不審の咎有故。若御申訳の品に寄其
侭人質になさんず計略と承る。斯云がひなき惰弱の人に。縁組せしは口惜しと恐れけも
（２７ウ）
なく勇気の詞。返へす答へも荒気の大将。佩剱に手のかゝると見へしが。五体二つに鳴海が
即死。逃出す内匠も後げさ。あはれ成かゝる次第也。ソレ小姓方御手水差上られよ。ハァハッといらへて
子小姓が。刃に注ぐ水叩き。身にかゝらふか白露の。玉ちる光目にさへぎり。思はず柄杓取落
せば。ヤァ小忰とは云ながら武気備わらぬ比興奴。成人して何の用。監物早く遠ざけよと。御機
嫌さん〳〵成所へ。当番の侍罷出。御所を止置たる。三浦兵庫頭殿。只今出仕致され候ゆへ。扣へ
られよとさゝゆれ共無体に通られ候と。言上すれば久次公。しぶとき奴。よいは構はずとも打捨
置。噛でくれんと御目くばせ。御傍近習もかたづをのみ。今や〳〵と。待居たる。されば執権三浦兵
（２８オ）
庫頭重時。三度諌めて退かず今日も出仕を尖なる。疾鎌を馬手に携へて。支ゆる者を弓
手に払ひ御前。近く伺公せり。大将見給ひやをれ重時。汝我心に逆ふにより目通りとゝめ置
たるを。押て出るは死を恐れざる馬鹿者。其上見れば賤しき土民の手にふれる草苅鎌を
持参せし。子細いかにと仰ける。コハいまめかしき御尋。君に諌を入事。御馬の先の働きより抜群大切なる
手際なれば。命をかばひ申べきか。某が諌言御用ひなき時は。さしも美麗をつくされたる此御殿
も。終に荒野とならんは治定。其時苅ん草かり鎌扨こそ持参仕ると。御目通りに差置は。
御諚も待ず監物武兵太。ヤァ執権を鼻にかけ。主君をさみする其腮切りさげてくれんずと。鍔打

（２８ウ）
たらけど見向もやらず。今既に関白の職を請継給ひ。天下の政務をいらひ給へは。六十余州は御心の侭ならずや。ｻ何を不足として父君にすねはたばり。邪なる御振舞こそ其意明ず。御幼少の砌より。いだきかゝへ参らせたる某に何の御遠慮。御心底明されなば。善にもせよ悪にもせよ。更々とゞむる所存にあらずｻｱ。承はらんと席を打。■水を流し申ける。ｬｱいわれざる忠言だて。聞も中々忌はしと。御座を立んとし給ふにぞ。走りよつてしつかと引留。ｨ、ｬ御本心を聞迄は。何条空しくやむべきかと。いわせも果ずけり飛し。見通りもせず入給は。大嶋最上はしたり顔。ひやうまついてそ付添行。御後かげ打守り。拳を握る悔みの涙。最早御親子の御中は馴古びたる緒のごとく。裂るに間

（２９オ）
なき御身の存亡。家来の身として安閑と。余所に見るべき事ならず。ｲﾃ此上は必死の御異見せん物と。立上つたる後より。突出す鑓は襖ごし。背骨を通し胸板へ穂先白くもつらぬいたり。ｬｱ何やつなれば尾籠の働き。奇怪なりと身をひねり。うしろなぐりに鑓の柄を丁ど切取身構へたり。監物武兵太ずつと出。双方一度に切かくれど。痛手もいとはぬ奇術の早業叶はゞこそ。ｬｱ御諚意成が手向ひするか。御諚意。諚意とのゝしるにぞ。抜身投捨座をかため。手向ひせねばたゝみかけ。切共突共動きもやらずｯ、任言命は召るゝ共。御底心を聞迄は。魂魄此土を去べきかと。一念すはりし。武士の胴も手足もずだ〳〵に。切きざまれて死したりし非業の

（２９ウ）
最期ぞ。あわれなる。誰かは斯と告たりけん。阿修羅の勢ひ久次公畳を蹴立踊り出。大嶋最上を手玉のごとく。とふど打付足下に踏へ。追返せとこそ申つれ。切害せよとはいはざりしを。我意なる計らひにつくいやつ。ねぢ首致しくれんずと。既に危ふき折も折。桃山よりのお使者也と聞ふるにぞ。二人をはるか庭上に蹴落し給ば起返り。何角に付て邪魔になる。兵庫頭めを打殺した手柄を無にする気違ひ殿。此方から除くれた。氏政公へかけ込で有事ない事注進する。待て居やれとかけ出せば。ｱﾚ誰か有召とれよと。の給ふ内に。入来るお園。何か白洲に立ふさがり。待た〳〵とさゝへたり。ｨｬちよこざいな女めと。

（３０オ）
抜連かゝるを事共せず。ぬけつくゝつつ無力のあしらひ両方の柄腕ぐるめにむづと取くつと引よせ。ねぢ付ればｯ出かした女遖見事。予が詞を背く上過言を吐し罪人めら。手討にせりず引すへよと。怒りのかんばせ。打守りさ
ればこそ。皆ヶ様なる御事が父君より御咎のヶ条となり。御罪を問正されんと有お使を。承りし私がかゝる御短慮の御仕業を。見捨さするもいかゞなれば。何卒御憤りを宥められ。此両人が一命を。お赦し願ひ上ますと只一言に顕わるゝ。心の器量吉岡が娘と見へて奥。床し。ﾎｯ久次に向ひ申にくき事よくやつた。科重罪の者共なれど。そちが健気の詞にめで。助けてくれふ追払へと。仰嬉しく引立く突はなされ。ｯ、其筈じやと逃ぼへに。大嶋最上いがみ頬ほう〳〵。御所を出て行。園は侍婢に持せたる。白木の折櫃御前に

（３０ウ）
直し。今日のお使。主人寄生承るとはいへ共。所労に依り名代として。家来貴田孫兵衛が女房園。かゝる役目を蒙りし故により。恐れ多き御目見へとしさつて敬ひ奉れば。ほく〳〵と打黙頭給ひ。貴田孫兵衛とは加藤が家に新参なれ共嗚呼の者と聞及ぶ。此度の三韓攻にも供しつらん。定て名誉を顕はすべきぞ悦べ〳〵。ｼﾃ父大領の御咎めはいかなる事にて有けるぞ。申せ聞んと緩怠なり。はつといらへてしとやかに。のぼるきざはし玉の床。おめる色なく席につき。ｨｬもふ御咎めの御ヶ条は数〳〵なれど。とくと御賢慮遊ばされなば。大抵に御申訳遊もせんが。子として親を調伏の。願書は君の御自筆。是ばつかりはいかな〳〵智弁かしこく

（３１オ）

ましますとも。御申開きは有まじとの御事なりと述にける。ハ、凡糾明にかゝり。陳じあらがふは罰せられん事を恐るゝが故。我今天が下において。誰をか恐れん。親はおろか。あはよくば一天の君も取て押こめ。万乗の帝位に即ば。天地は父母なり外に親なし。刃にかけず調伏するは。まだしも好みを思ふにあらずや。言訳などとは片腹痛し。すされやつと居尺高。ちつ共臆せず摺寄て。所詮御明りは立まじと思し召。悪事と知ても取直さず。我慢の意地を立給ふか。持参致せし其箱の内に籠しは狼煙の籏。楊るを相図桃山へ召置れたる君のお妾。三十余人を切殺し多勢を向ん御手筈。

（３１ウ）

迚も変ぜぬ御所存ならば。やみ〳〵人手に渡さんより。勿体なけれど御首は。園が只今給はらん。とはいふもの其がまあ。何の本意でござりませふ。どふぞお心ひるがへし御親子和睦有ならば。御首給はる手柄より。百千倍の誉ぞや。コレ御聞分下されよと。或ひは怒り。あるひは歎き。サァ〳〵〳〵御返答遊ばされよと詰かくる。ヤァ暫くと帳台より。御声高く万所。かけ出かけより久次の。たぶさを取て引付給ひ。ェ、情ない人非人。おのれを高ぶる奢より。かゝる無道をなしけるぞや。コリャ此母が形を見よ。破れ垢づく木綿物まへたれ。襷打捨ず。たばひ持しは賎しき素性昔。忘れぬ身の守り。夫も前は兵吉

（３２オ）

とて二合半の草履取。天性いみじき果報にや。空恐ろしき立身出生。四海の主と成給へど。猶飽たらずやおぼしけん此度の三韓攻。武威につのりし企と。思へど全く其身の御器量。そちには何の器量がある。本は賎しき自が甥子なれど。夫大領の養子となり。一の人と仰がれて。諸人の鑑となるべき身の。其行ひが浅ましやと。有合ふ中啓取より早。叩きふせ〳〵。うたてや魔魅の見入にて。親に刃向ふ悪逆心。かゝる不孝の子をかばひ夫を怨みへだてたる。其罪科は何とせん鬼畜の様な心にも打しは義理を思へかし。天命尽ん其時に。千たび百たび悔む共甲斐なき事ぞとかつぱとふし。せぐり上たるさけびなき。お道

（３２ウ）

理さまやと計にて。園も涙の雨やさめいさめ。兼たる歎きなり。あわれにひるまぬ剛気の大将。ヤァ舌根は裂爛るゝ共。いつかな用ひぬ其證拠。是見給へと上段の籏追取てさつと流し。父より請継定紋の。籏を破るは親子の手切。まつ此通りとずん〳〵に引さき捨れば万所。涙払ふて床脇によせかけ置れし塗籠の。弓矢手挟御気色替り。親に敵たふ極悪人。矢先にかくるは我夫へ申訳でと打つがひ。向ひ給へばさもそふず。いざ遊ばせよと矢面に。たちまち飛来る鷲の羽のかぶり矢宙にひつつかむ。手の内かれしお園が手錬。ヲ、よふぞやお出かし遊ばした。此一矢にて母君の御心くもらぬ潔白は。恐れながら

（３３オ）

此園が。慥に見届奉ると利発の計ひ感心有。暫時も汚れし此御所の。火宅を出て自らは。高台寺にて落髪し。逆縁ながら久次の亡跡弔ひ得させんと思ひ切ては中々に心すゞしき御まなじり。見返りもせず出給ふとゞめ申もとめがたき。一時の危急大将の。御身の上とあせれども。ちつ共騒がず莞爾と笑。是なる折に籠たりし。狼煙を挙れば此所へ。大軍たゞちに向ふとな。シャ面白しと飛かゝり。蹴返す箱よりのろしの籏。火勢に激して空中にのぼるとひとしく四面より俄にひゞく貝鐘太鼓。さも物すごく聞へける。ハ、、事おかしや何万騎にて寄たり迚。すがれる花に夕嵐。一当あてゝ追ちらし。人種尽

（３３ウ）

してくれんずと奥深くこそ入給ふ。ェ、是悲もなき御運の末もふ此上はと立上る。間もなく込入多勢の軍卒。切も切たり女の生首三十余級。手毎に引さげコリャ〳〵女。斯あら

んと氏政公検察有て相図を待ず。寵愛召れし女ばら一々押へてかき首討首。久次殿の冥途の餞別。見せてくれんと広言し右往左往に乱れ入。ホ、、、餓鬼も人数の葉武者達。久次様の思ひ出に存分堪納遊ばす程。切殺させまし其跡はお首を貰ふていぬ計と。かい取脱捨祷引上。寝殿。目がけ幾間数几帳の。かげに窺へば。はげしき武将の太刀先に。あたりかねたり寄手の勢。とかくは射取と

（３４オ）

立ならび矢襖つくればふしぎやな。一団の心火あり〳〵と。はためきわたつて飛狂ひ。射かくる矢先をことぐく弾き落せば久次の。御身に一矢もたゝばこそ。むらがり立たる敵中へ切入給ば恐れをなし門外さして引しりぞく。ヤァ罪つくりに何かせん。いでや苦界をさるべしと。かけ戻つてどつかと座し。抜かき切らんとし給へども。金剛力にておさゆるごとく。剱持手もしびるゝばかり。きつとあたりを見廻し給ひ。陰々たる霊火の中に。さもかすりなる声有は。ハテあやしやと耳そばだて。ヒャァ兵庫の頭が亡魂にて。我本心を聞ざる内は。中有にまよひうかまぬとな。ェ、左程迄久次を思ひすて

（３４ウ）

さる忠義心。ふびんのものゝ身の果や。汝といひ数多の女むざんの横死をさせたるも。拠なき我胸中。今こそ語り聞せんず。生害とゞむる事なかれ。下がれ〳〵と追しりぞけ。剱逆手に側腹へ。がはと突立引廻し。父大領老後におよび。愛妾宇治の方の胎内より。出生ありし久丸に。天が下をゆづらまほしく思召。此久次を忌嫌ひ給ふ故。父母の御中確執と。成たる事の歎かはしさ。某なくば御中もしぜんと和熟ましまさん。去ながら。御身にもかへひたすうに御慈愛深き母なれば。命のお暇願ふとも中々承引あるまじと。心にあらぬ非義非道。疎まれ死なばなき跡

（３５オ）

の歎きもあらし。且又。何卒父の御存念立させ申も孝行の道を守らん其為に。道に背きて勿体なや。親を呪詛する其大罪。死後に墳墓は残すとも。畜生塚共。悪逆塚とも。譏らばそしれいはゞいへ穢れぬ心は明らけき。日月照覧ましまさん。今こそ達せし我大願ハ、、、悦ばしや嬉しやなと。痛手も屈せぬ勇将の猛き御目にはら〳〵涙。忠孝全き久次の今はの詞末の世に。汚名を残す城州の畜生塚の因縁を思ひ合すもいたわしき。お園はかしこを転び出。ヶ程正しきお心を露計だにしるならば。仕様もよふも有ふ物。あたら名君名将の御武運つたなき御最期と。悔み

（３５ウ）

歎げはコリャく此事口外するならば。未来永々幾万劫浮む時節は有まじきぞ。必ず他言致すなよ。ハァ、何者にか我首を。渡すべきそと思ひしに。幸ひ〳〵そちに得させん介錯せよ。ハイく〳〵陪臣風情の女房がお首けがすも冥加なき。御赦されて下さりませ。ヲ、赦す〳〵に抜かざす。剱の稲妻。散乱たる陰火の。内より兵庫がすがた。影のごとくに。顕われ出。せつなる殿の御本心聞得し此身は。即心成仏なむあみだ佛〳〵の声計。はかなく消る君も今。三十一期の夢覚て刃の霜と失給ふ。お園はなく〳〵ご首をいたきかゝへて幾度か。見る目涙に呉竹や伏見の御所へと立帰る

（３６オ）

五冊目

憐むべし。鮮軍一度伍を失ひ。千里に満る鯨波。いづく戦場ならざらん。勝ほこつたる日本勢。とある城下に立留り。イヤノフちよん兵衛殿。此斧右衛門と其元は六助様の御取立。又此太郎兵衛と甚頭郎兵衛。松兵衛はこちの婆様が死しやつた時。死骸を世話に成た礼。

此斧右衛門が取持て六助様の家来分。今度の軍に此様に連立ては出た物の。枝
おろしたり牛追外。兵法知らぬ此仲間。初手はてきなふこはかつたが。何知いでも日本人。唐に
合しちや強いてのよ。ヲ、サそふだに。釜山海を上つてから。日数がけふで二百日。日に十里づゝ

（３６ウ）

切入ても二千里計入込だ。勝も勝たがめつそうな深入。見れば爰らは海辺の在所。覗き
の絵図で見た様な見事な橋もかけて有。屋根をば昆布で葺たのは。鯡の住家じや
有まいかの。実さる事もござらふちや。どの道遠い戎の果。めつそにや油断ない智兼の
評義はしどもなかりけり。誰ために。晒すか雪の白。絹を。入て抱へし唐金の。盥片手
に褄からげ。川辺に近く歩み寄。斧右衛門声をかけ。ヤイく女物問はふ。爰は何所なら
そちや何者。身が斯向た方角は西か東か南か北か。何と〳〵尋れば。ァィ此里は
三韓の北に当つて国続き。所の名をは女直といひ。晴天にや日本の富士山も

（３７オ）

戌亥の方に見へやんす。定めて名にも聞しやんしよ。女護の嶋とは爰の事。殿様も
女百姓も女。男がなけりや夫もなし。色付頃は肌ひろげ日本の方から吹風を
請て生るゝ子も女。適に男が他国から吹流されて来る時は。直にお上へ召上
られ。卑賤の只入ね共。縁でかな松前から。昆布取に出て流された。後藤治
郎といふ人と夫婦に成て間もなふ。はかなや去年死別れ。わしや其後家で
ござんすと涙と倶に語りける。ム、扨は爰が聞及ぶ女護の嶋とな。シテ又そふいふお前
方は。ヲ、遠き者は音にも聞ん。近き者は目にも見よ。今日本の強者鬼舎官

（３７ウ）

正清公の郎等に貴田孫兵衛とは我事也。ァノお前が。オ、サ元の名は六助と言やんす。スリヤお前が六助様か。毛谷
村の六助といふ山賤でごんず。ェ、と恟り取落す。絹は流れて行ぞ共。しらず構はず六助が
顔を詠めて□（革+可）（あき）れ居る。シテ其次なお方はへ。我は小西の大忠臣。龍の大将木戸作
右衛門。次は万の■右衛門。うらは勝市兵衛也。身共は三浦又蔵と。いふ顔鼻も動かさ
ず。出次第名乗強者の。名にはそぐはぬ武者ぶりなり。折からとばかは走りくる。庄屋
も女が息わくせき。コレくせんだら女。さだめてあの衆の事で有。鼻の高ふて
強そふな。男が四五人今爰へ入込で来た評判がお上へ聞へ殊ない御機嫌其

（３８オ）

中でいつち最初にいる人が。ぼんぼら皇女へ上り物。其余は御家老物頭。分取にして閨の
伽。抱してねるとでござんする。サ、、今じや〳〵といら立に。言捨てこそ走り行。聞て惣々がぞつく
ぞく。いきり出せば後藤後家。皆様嘸や嬉しかろ。出世は此時今宵から。軍は組打一騎打根
気次第に御褒美は。取次第しやと鳴子嬶ぐはら〳〵いふてぞ【三重】行先は何所成らん。かしこくも。
女護の嶋の御主ぼんぼら皇女の御館。木草のふりも異様な中に。かはらぬ空の日と。爰
の女もさいまぐり。一所に打寄て。ノフてんぷら女ちやんふら女世に世界に不自由な事も多
かろが。此嶋の不自由ながら不自由な事の天上じやのふ。生れるも〳〵女ばつかり寄合て。

（３８ウ）

男といふちやかけもない。どんな国へは生れてきた。迚も女に生れるなら。こちや日本の女に
成たい。なぜといや。日本は大きに和らぐ大和の国といふげな。何と女の為に大きにやはら
かなこのもしい国じやないかいの。ヲ、有がたい国じやのと目を細めてぞ黙頭ける。ヲ、ちよろ
けんの何いやるやら。それさへお傍のかんてら女。おいどの大き成たのは木で作つたか角細工か。
指人形が過る故。徒者じや悪性なと。御前の首尾が。悪なつたモ。たとへ罪には沈まふ

と。生た男と一生に。寝て死んだらば仏じやと。はかない望官女共うはつき咄しの。腰
折から。足もいそ〳〵後藤後家。ノコく官女達〳〵。御上の御意のかゝつたる日本人の男共。只
（３９オ）
今是へと案内の声聞へてや。奥よりも。それ待兼しこなたへと。出る姿は此嶋の。主と
遉福やかに。振り出したる頬の先。赤いはさぞな現にも。男のほしき。御目元こなたは後
家にいざなはれ。谷の戸出る鶯のそれにはあらぬ斧右衛門。コレ後家様アノぼんぼら様のお
館はもふ爰かへ。わしや恥かしいと媚かし。跡に続いてどいやどやめい〳〵着る番具足。脱
てつらりと居ならべば早饗応の酒宴に。さいつ。さゝれつ盃の。時の調子も甲ばりし。
三味の調人や鉦太鼓。いつか覚へし日本哥。皆一様に声揃へ。お前其様に酒呑で猩々に
ならんす下心。アレハナンコレハナンたとへ猩々に成迚も此酒呑ずに居られまふか。アレハナンコレハナン。わたしや蛸の
（３９ウ）
性で吸付けれど。さい〳〵お前海老の性ではねのけるよんのこのこ〳〵さんや舞てさま
〳〵盃に酔が廻りの官女共。五人が傍にもつれ合暫し時こそ移しける。せつたら女もいさみ
立。サアく是から皇女様。比翼の床の新枕。皆はこちへと招かれて。せぐりのきたる葉武者
共。ゑぢかり股の見へ悪く。皆々奥へ歩み行。跡は二人が差向ひ。おもはゆげなるぼんぼら女。いとゞ
あからむ横顔のすぐちもゑくぼ斧右衛門。こたへ兼てや傍に寄。コレ皇女やじやない。これからは
日本風。嬶こちよりやいのと引よせて。そもじの名は何といふ。ハテ知た事ぼんぼら女。ム、すりや
そもじは敵討じやの。ソリヤなぜにへ。イヤサ。敵討に違ひはない。ガ此敵討成就する事思ひも
（４０オ）
よらずソリヤ又どふして。ハテしれた事そもじの名。ぼんぼら女で敵が討れふかチヤンチキ。〳〵〳〵やちやつと
寝たいと
抱付。そしてまあ唐の女の着物は。やゝ子の襦袢見る様で。袖から袖へ手を入てじつと引寄。抔と云
しつぽり事は叶はぬ仕立。デ、ちよつと玉の肌ざはり。マ此あてやかさといひさまに。襟に差込
手にさはる乳に恟り。コリヤ何じや女に似合ぬ山椒粒。ナゼ此様にちいさいや。エ、エム、これかへ。是はな。アノソレ
またやゝ産で見ぬさかい。モフく何も問て下さんすな。わしや恥かしいと赤らめる顔の恰好
膚のきめ。心を付る斧右衛門。さあらぬ体に猶抱しめ。イヤモたとへ形はどふ有と斯寄合たがふ
かい縁。心解合紐の下へちよとお見廻と。用捨もぐつと差込手先。胸の下へもやらばこそ。しつかと
（４０ウ）
とむる手は盤石。男勝りの強力に。ひらりと刎退奥の間へ。飛鳥のごとく入たるはあやしくも。又
恐ろしし。扨は曲者女と変じ。味方を計る謀よなと始めて思ひ辺りの座敷。あつと叫んで四人
の武者共。形もしどろに走り出ノフ斧右衛門殿一大事こそござんあれ。女と思ひ気をゆるし。抱て
寝たればノフこはや。皆究竟の男共。下からエイと刎返し。すつての事に唐人の。岩衆になろと尻
こぶた撫廻してぞ訴ふれば。ホ、ヲさこそ〳〵。案内しらぬ敵の館。長居は無益変のもと。いざ打立
と一群に。もと来し道へ引かへす。ヤア比怯なり日本へ逃る迚逃そふかサ覚悟せよとのゝしれば。
怪しと皆々振返る。中にもちよん兵衛大音上。ヤアさいふは后女とせんだら女。最前見しは正しく
（４１オ）
女今こと〳〵く男のかたちノフ扨は見所によつてかはるかと□（革+可）（あき）て。顔を打守る
ヲ、不審な尤。ほんぼら女とはかりの名。我こそ異国のちやんめら王。後藤が後
家と云せしも。官女と見せしも我計略此三韓に乱入せし。日本勢は色好み。女
と見せておびき入。一々討て捨ん為とはしらずしてうま〳〵と。謀に乗し蠅虫め

ら。アレ遁すなと下知の下。ハット答へて下官の銘々かけ出〳〵取巻たり。シャ物
々しと抜合せ。入乱たる戦ひにしばし時こそ。移せしが。神力くわゝる日本人。武術
に疎き異国勢。残らず剱を打落され。叶はじとや思ひけん両手を上てヤレ待

（４１ウ）

てたべ日本人。たつた一言いふ事有。斯なる上は命は惜しまぬ。人手にかゝり死ん事末代
迄の国の恥。只情には日本流。切腹をさせてたべ。偏に願ひ存ると涙くんでそ
手を合す。ヲ、よい覚悟とくせよと。皆々傍に守り詰。逃ば討んす抜身の下。
今が最期と席をかため。剱逆手に胸先より。背骨へぐつと突通し。同し
枕に死してげり。斧右衛門勇立。さいごは既に見届けたれば。とゝめに及はず打立
ん。先駆は某後陣はちよん兵衛。殿ぬかるないそふれと。聞覚へたる戦場の。詞
計は軍師に。同し様なる葉武者共打連てこそ出て行。跡にふしぎや伏たる死

（４２オ）

骸。動くと見へしが忽に残らずむつくと。起直り。中にも強気のちやんめら王。膝
打叩き高笑ひ。ハ、、日本人の大馬鹿めら。偽りのてだてを以て。死で見せたりや誠
と思ひ。悦び勇みいふおつた。其時爰を追びらき。見せたかつたと惣々か。一度
に肩を押ぬげは。死なぬも道理胸元に。背骨へかけていきぬけの。穴珍
らしし音に聞。穿胸国の人間を見るは今こそ初めなり。ちやんめら重てヤアく
者共。もはや一戦事済ば。我古郷へ立帰らん。皆々かいちん〳〵と。呼はる声に下
官の銘々。早押出す鑼太鼓。勝鬨上るいさみ声。乗馬ならぬ紫檀

（４２ウ）

の丸木いさ御召とすゝむれは。心得腹へ突通させ。下官どもやい。ハアアッア乗棒やれ

第六

されば三韓蔚山城といつぱ。八道無双の名城にて。嵯峨たる碧嶺怩峙々たる輒く落ぬ要害
なれ共。加藤正清乗取て明韓百万の多勢を引受。屡敗る猛勇に敵は却て見用心。遠巻にし
て攻寄ねは軍の沙汰もあら玉の。年立初む門松や。霞靉靆注連縄に。和国の春を。寿きける。
降参したる唐人も。日本人も寄集り。扨皆目出たいじやないか。しかしこちらは唐へ来てから二度目の
正月。祝ふ雑煮も肝心の大根がないで代りには。生の大人の人参を幅切にしてふんたくにしてやる故か。天窓が

（４３オ）

ふか〳〵する。其上豚の羊のと油濃肉食に飽き果た。貴様達も日本へ連ていんたら。はつの付焼鰯のぬた。
沢山に喰そふと。口々いへは唐人共。ヨカソレく。ノセタイノチウ。ガそれよりは此天窓降参のしるししやてゝ。
元服迄仕たからは。諸事日本風てやらかして見たいて。ヲ、扨紺のだいなし作り髭。油気のない天窓はさせ
ぬ。指わげかのんこもたせ。望次第皆よい男に仕てやるぞ。併マ其迄に望か有。昔から聞ている唐人
の寝言といふもの。聞事は成まいかと。なふりかゝれは。ヨカソレ〜此方にも日本の大名が。火にくはつたを見せ
てほしいと減らすロ。唐も倭もあはずれに。粋ちやは〳〵やかましき。慶賀の礼服改て堀本覚兵衛　鵤九
郎二人打連立出れは。ソリヤ御家老のお出じやぞ。きよろ付て居て呵られなと。皆こそ〳〵と逃て

（４３ウ）

入。席定まつて堀本覚兵衛。イヤ何鵤殿。珍しき異国の越年。日本にても今日は在国の諸大名。元日
の拝賀最中ならん。いかにも左様。爰元にても義式万端たらわぬなから。和国をまねひお互に祝義は
相済。去程に三日以前の大合戦。貴田氏の大勇に手ごりして臆病風の唐人原。頬出し一つする
にこそ。合戦の沙汰なけれは。扨々拍子の抜た籠城と。咄半へ客舎より。鎌髭頬も大館軍蔵。
主の権威をいかつげに会釈もなくすつと通り。コレサ両人。コリヤいつ迄待して置召るゝ。擒とせられし錦
夫人三韓第一の美人たる条。急き日本に召寄よと。殿下の御諚を承る。主人氏政名代として罷向つた

此軍蔵。当城へ来てけふで七日。夫人を手渡しせぬのみか。対面もせぬ不礼の正清。陪臣なりと

（４４オ）

侮つてか。是非今日は錦夫人請取て立帰ると。役目をかさに罵るにくてい。心にさはれど堀本覚兵衛。此間より申ごとく。主人正清所労によつて。対面にあたわず思はぬ失礼。ヵ迚もの義に今暫く。御用捨なし下されと。なだむる両人猶も図にのり。ヤァならぬ〳〵。小勢の城を取囲敵は大軍其上聞ば此城には兵糧が尽たとやら。殊に敵より水の手を取切たれば。何時落ふも知れぬ籠城死人同前の御自分方。待といふ迚まだら〳〵と残しておる隙がない。サァ病家へ参つて直相対。案内しやれとつかふどに。くしや付詞門松の。中につゝくり辰巳上り。物もふ六助お礼申ますと。春めくけふの床上下。しやつきり木綿の立棒嶋着たる男の出立ばへ。イヤ申。今あちらで聞ていれば。テモマァやかましい御上使様。コレ元日

（４４ウ）

早くから其様に腹立ると。今年中修羅を燃さにやならぬそへ。コリヤ大方元旦とは。隣同士大晦日の生れじやな。エ息の短ひお人じやと。ずつけり云ば眼を剥出し。ヤァ見れば軍中には見馴れぬ下郎め。上使に向ひ慮外の一言。すさりおらふと呵付る。イヤモ云はんせいでも知れて有毛谷村の六助といふァイ下郎でごんす。ヤァすりや音に聞へた力強ァイ加藤家の家来となり。今の名は貴田孫兵衛。始からの約束で。余の家中とはあちらこちら。式日には昔の形で親方よりマァ先へ。二親の墓へ参りやんすか。殊にけふは大事の正月なれど。頼み寺へは千里隔て有事なれば。しよう事なしに此城から日本の方へ東向て

（４５オ）

御礼申で来たのじやコレ此どてらを着かへぬ内はいつ迄も六助といふ柴苅。マァそふ思ふて■ひましよと。心詞も繕わぬ。胸の大木。生貫男。ム、其又柴苅の六助なれば此場へは何で差出るぞ。差出るといふじやなけれど。ちつと計尋て見たひ事が有て。トいふは外の事でもごんせぬ。いわん通り大軍か取巻て居る此城。こなさんは又其中をとの道からどふ廻つてごんしたと。問れてざつくりつまらぬ大館アイヤ夫は彼。ヲ、それよ。名にし合ふ此軍蔵。支へる大軍打破つて。通つて来た我勇力な。夫が又何とした。ハ、ァ遖な勇士と見へるは。マァ夫は聞へたが。まだ合点の行ぬといふは。此城に兵糧のない事や。水に飢て居る事を味方にさへ深ふ隠してしらさぬ大事。こなたは

（４５ウ）

どふして知つて居るぞ。ヤァ。サァ夫は。サァくどふでごんすと。押れて上使はじり〳〵舞。ハ、ちつとそふも有ふ孫兵衛なれば今爰で。ぐつと聞抜所なれど。六助だけて咎はせぬ。其替りには返事もせぬ。待て居るが退屈なら。宝引でも仕て遊んて居やしやれ。又力だめしの遊びなら。おれが相手に成ましよかと。一くはされて底気味悪く。アイヤく心ざしは過分なれど。是見さつしやれ正月故か力瘤めか藪入を仕おつたか。どこへやら引込で今はおらぬ。返事はいつでも春永に。承はらふと云捨て。追手の客舎へ出て行。引違ふて軍卒一人罷出。大明よりの勅使と申。城外に彳候が。いかゝ計ひ申さんと窺へは。堀本聞より扨こそ〳〵。兵糧乏敷城内を探り見る計略ならん一々討取

（４６オ）

耳塚の数に加へてくれんずと。鵤共に立上るを。マ、待んせ。敵の方に方便が有は。こつちも軍慮をやつたがよい。何事もわしが呑込で居る程に。お前方はナコレ。斯々さんせと耳に口其身は奥へ入にけり。鵤九郎士卒に向ひ。供の下官は門外に残し置。勅使計を是へ通せ。麁略なき様子行と。下知に心得引返す。侍。間程なく大手の方。開門の音厳に。衣冠繕ひ大明の勅使局李松。朝鮮の副使鈍面会。文武の両官座に直れは。堀本鵤出向ひ。我々は加藤正清が郎等ども。御勅使には万里の遠境御苦労候と手を付は。仕済し顔にて鈍面会。数百万の逞兵を以て取囲。此蔚山既に落城近き所。聖徳備わる大明皇帝。哀憐深く下し賜る勅り

（４６ウ）
城将正清罷出。拝聴せよ。ハッ主人正清此間風邪に犯れ。軍役も相勤ず。勅の趣我々へ仰聞れ
下さるべしと。身を謙り申ける。局李松莞然と打見やり。主命別の子細にあらず。此度日本大領
久吉。朝鮮狼藉の事叡聞に達し。逆鱗ことに甚し。去によつて。百万の大軍此一城を取まげば。
轍の魚にひとしき籠城。過を悔加藤正清降参して。擒の太子錦夫人を差戻さば。罪
を赦して本国へ。帰さんとの綸言なりと相述れば。こなたの一間に高笑ひ。ハ、珍しき大明の勅使。
大日本高冨家の軍将加藤主計頭正清。見参せんと。障子ひらかせ貴田孫兵衛。和国の威。
義を立烏帽子。大紋の袖九万里に羽をのす有様。諸侯の粧ひ。鈍面会痿ぬ頬付。扨は
（４７オ）
其方か正清よな。兵糧に尽たる此城世留統須が軍配にて水の手を取切たれば落
城は眼の前。後詰すべき日本勢は逃走り。一本立の此城中。擒を渡し降参するか。ハツア
日本小国の被官たる某。大明皇帝の勅りを蒙るは。弓箭の冥加是にしかんや。勅に
随ひ擒を帰し降参と申たけれ共。罷ならぬ大明より懇望有夫人は勿論。太子姫宮先
達て我国へ送りし上は。皇帝の勅にもせよ。日本弓箭の棟梁たる。久吉公の下知
なき内は。いつかな叶わぬ。且又味方の諸軍勢。逃失しとは何の譫言。我日本に生れし者。
左程未練に命を惜み。逃走る者一人もなし。よし誠にもせよ。正清一人有内は。何百
（４７ウ）
万騎も蠅虫同然。降参抔とは慮外千万。大明の国主へ加藤が返答是見よと。
弓箭追取きり〳〵と引絞れば。二人は仰天立居もそゞろに胴震ひ。目当ははるか庭
前に城中頼し用意の大瓶。二つに射破ればどう〳〵と。漲流るゝ水の音一滴も残らは
こそ。味方も恟り敵は猶。舌を巻てぞ恐れ居る。ァレ見よ両使。大丈夫の一言は今流せし
水に等しく。元へ返らぬ誓ひの一箭。水なき城に貯へし瓶を打割用水を流したれば。
早く帰つて寄来れよ。遅なはらば逆寄に討て出て鏖四百余州を切取て。大明の
皇帝を日本の奴と成べきぞ。命は助る早行と。神国の威を顕然と詞尖に云放せば。
（４８オ）
気を呑れたる局李松。剱ひねくつて鈍面会。ャァ大国の勅使に向ふ無礼の雑
言。鬼舎官と思ひ外食に飢たる餓鬼舎官。覚悟せよと切付るを引ぱつし。腕首
掴んで真逆様。起上るを鵤が腰骨ポン〳〵踏飛され勅使も共に叶はじと。城外さして
逃帰る。堀本鵤大に感し。主人正清密の帰朝。当城を預け置れし程有て。連大
器孫兵衛殿。併しか程に渇したる用水を流されしは。子細ぞ有んいかに〳〵。ホ、不審は尤。
主人が帰朝も讒者の業。危窮に迫る此籠城。万一士卒気を屈し。落城に及ひ
なは大切も水の泡。用水を捨たるも味方の心を一致にして。敵に勇威を示さんため
（４８ウ）
程なく大軍寄来らん。用意せられよ旁とちつ共動ぜぬ。大胆不敵面白し〳〵勝負
を一挙に見ん事は我々迚も所望。ィサ物の具せん尤と皆とふぜんの勇兵強兵引
別れてぞかけり入。透を窺ふ大館軍蔵。相図と見へて怪しの高麗笛。吹も竊〳〵
空井戸より追々出来朝鮮の忍びは異形の黒装束。眼計出せし逞明巾。摺合ふ計
こぞり寄り。ッ、ヘイジウン。スルナンキョ。ピシュイカンシイヽ。音高し〳〵。我主人北条氏政日本にて事を
計れば。送られし密書の通り。此地の義は約せしごとく。ウンチャリシュンサイイ
ケナンコウ　ム、出来た〳〵。城中の変を窺ふ此軍蔵。夫人さへ仕てやつたら。しめし合せし
（４９オ）
時分を待。知らせの相図は日本のボンとかけなばバアと答へよ。必ず手筈を違ぬ様。ナソレ。

ボンバアいけと。軍蔵か。千舎流義の進退に相図を。定め待居たる。本丸には貴田孫兵衛。胸をかためし兵具の出立傍に。心奥深き燕居の間に打向ひ。蔚山の籠城も軍の終り近付ば。申上べき子細有。苦しからずこなたへと。詞の圍押開く。障子は我身の上なれや。■艶の其一枝に香を■す。きのふの花はいつしかに。うつらふ姿しほれ咲。彼西■にとらはれし。思ひも斯や錦夫人。涙の時雨ぬれて干ぬ。うきをや袖に見せぬらん孫兵衛近く差寄て。様子は聞も給ふらん。夫人を返しあたへよと。大明国より勅使

（４９ウ）

至来。達て望まはいたはしなから。唐使の見る前孫兵衛が。手鑓の錆を成へかつしを。当城にはおはせぬと追返し。又殿下の仰と北条氏政。君を日本へ迎んと。家来を上使に差越しも。察する所錦夫人。容色い見しうまします故。深閨にすゝめ入殿下に信義を失せん氏政が奸計思へどいなむにかたき君命。主人正清是を察し。帰朝の砌某へ仰置れし密意の趣。ｻ夫人の心承つて計らふべき旨有。御所存いかにと尋れと。涙より外いらへさへ。程住馴し我国を。離れていづち行衛も。定めなき身の悲しさよ。王城の乱れより。別れ〳〵に遠方の。君は大明自もさまよふ内に此城へ。擒となりし此身より。只悲しきは

（５０オ）

姉弟の宮は何とかなれ衣あかぬ別れの恩愛は。尊きも賤しいも。いづれ替らぬ親心。替り果しは世の中のつらやと計のたまひて目にもる。露の玉荒。孫兵衛ずんと立上り。思案の底は白木の三宝。松竹梅も初春を。寿く蓬莱所に居置。是見給へ。松は千年の君に表し。大明にまします朝鮮国王。竹は薗生の女親王。春に先たつ梅か枝は。取も直さず春宮太子。此蓬莱の都を離れ。遠き唐土日本へ。潜行有しを此如く。再ひ元へ植うつす。御思案有と孫兵衛か。心を込し蓬莱山つく〳〵と打詠め。秋津嶋にありと聞。蓬か嶋をかたどる蓬莱。楊貴妃も爰に至り。唐の帝の

（５０ウ）

恋給ひし。昔を今に自も。日本へ渡らは姉弟の。宮を助る種もやと。深き情の謎ならん。解は幸ひ玉琴の。唱哥に寄て自が。心をさとり給へやと。立る琴柱の。しらべさへいとゞ思ひに。音もくもる。七尺の屏風も。おどらば。なこり。越さらん。羅綾の袂も引はなこり。切ざらん。ﾑﾝ燕丹荊軻秦舞陽を頼。咸陽宮にて始皇帝を刀下の客と成し時。皇夫人此秘曲を弾し。君を助し貞女の誠夫は帝。是は太子。ﾑﾝ夫人の願ひ。時に取ての妙曲〳〵。直成琴の糸筋も。妙成色音に傾国の。紅顔うへつて御身の仇。望叶はゞ操を捨。日本へ渡る御心か。ｻｱ夫は。此国を。去ては遠き

（５１オ）

日の本の。玉の台の。春もうし。あかねれつのかたかた。頼みがたしや古郷に人にはあらぬ人心手玉もゆらに中の緒に包む心をいはこすや。問も。答へも琴の音の。空にもかよふ松の風。颯々たる声ならで。遥に聞ゆる鐘太鼓。らつぱちやるめら山吟に。動揺してぞ物すごし。耳をそばだて貴田孫兵衛。ﾊﾃ心得ぬ隊伍を調へ押寄る敵軍ならは今早春の気に旺し。陽勢盛んなるべきに陰に閉たる貝鐘太鼓調子も合ず散乱するは。敵陣に変有しるしか。何にもせよ夫人には暫らく彼処へ御入有互ひの望みは胸と胸。此蓬莱も。琴の返事も後刻〳〵と孫兵衛か残す詞も奥深く。光りを隠す錦

（５１ウ）

夫人あやなくしほれ入給ふ。猶乱調に撞立る。金鼓の響に心を付。みやる追手の櫓よりかけ来る鵤九郎。扨も某遠見して寄手を今やと待所に。敵の御陣騒立。先陣共に色めく有様味方の救か同士討かと。猶も窺ふ遠目鏡。よく〳〵見ればｱﾗふしぎや。

異形の若武者只一騎。数百万騎の軍中を。縦横無尽に切破り。城を目がけて馳来る勢ひ面に向ふ唐人原。或は胴切から竹割一人も生るはなく歩立ながら其働きイヤ中々人間とは見へ候はず神の化現か天狗かと驚きなから詠れば孫兵衛きつと眉をしかめ味方の内に左程の若者覚なし。何にもせよ敵軍数

（５２オ）

万の其中へ只一人切入強勇心憎しと伸上り遥に見やれは向たる寄手の陣。目撃一瞬籏差物西方東方へなびきあふ中に一降日本武者男とも又女とも■つ隠れつ深山木の木末に花の。■きかごとく三国の其昔魏の百万騎を悩せし錦馬超が勇戦を爰に見るかといさましし覚へず孫兵衛膝を打。ハァ逋英雄希代の若者出かす〳〵と機嫌猶打守り詠居る終の働き件の若武者したふ敵を追ちらし。掘際近く声励まし。城中へ物申さん。日本筑紫の御陣より。正清公の牒状有。爰明給へ人々と。勢ひ込で呼はれは。櫓の上より掘

（５２ウ）

本覚兵衛日本武者とは見ゆれ共見知なければ性名を名乗られよとぞ申ける。イ、ャ名を申迄もなく。千里を隔てし過急の御使用心の為ならば割符として絵はつたる。加藤家の馬簾の差物是御覧ぜと差上れば。まがふ方なき馬印。相違あらじと堀本が下知に開くる門の戸も。遅しとかけ入若武者の。敵に勝山兜した。思ひがけなき孫兵衛が。ャァ女房園にあらざるかと。声かけられて嬉しさの着たる鎧も脱捨て下は媚くはで姿。ナァなつかしや孫兵衛殿。有難いは殿様の此御自等と手に渡し。お文遣ひに来ればこそ御無事なお顔見る事も。

（５３オ）

頼求めし彦山の。神の力とすがり付。嬉し涙は百万騎を取ひしいたる躰はなく指ざし囁く軍兵共おぢ恐れたる兵の。可愛らしさに顔見合。再ひ呆れ守り居る。堀本鵤異義繕ひ。コレハく其元が聞及。貴田氏の内宝お園殿とな。イヤモ聞しに増る只今の働き。逋お手柄〳〵と。誉らるゝ程恥かしく。是はマァくあられもない。漸切抜来りもお主の仰と我夫に。逢ふと思ふ念力計。大胆な女じやとお笑ひなされて下さるなと。覆ふ袂にもれ出る。笑顔も愛持功の者。孫兵衛牒状読終り。ハ、ァ殿の御賢慮我肺肝。正に竹節を合すが

（５３ウ）

如し。いかに旁籠城も今日限り帰朝せよとの此牒状。しかし大軍取囲めばたやすくは叶ふまじ。兼て計し閑道より思ひ〳〵の退れよ。某一人踏止り。寄手のやつ原人種絶して開城せん。早く〳〵と即時の軍配。堀本覚兵衛小躍りして。我々迚も一働き帰朝の手土産鵤殿。イザと二人は立か弓。箭たけ心の張強く。軍卒引連入にけり。お園は跡を見送りて。積る思ひも今更に。何と云寄る詞さへ床しさの猶先立て。コレこちの人。永々の在陣か。いかふ苦労に有たやら。お顔のやつれ色艶も。心地悪ふはござんせぬか。是ナァ。人に計物いわせ。何ぼふ堅い軍

（５４オ）

場でも。久しぶりで逢ふた女房。詞で成と湛納させて。呉たがよいともつれ寄。耳にもかけず懐中より。取出す一巻恭々敷。コリャ女房。此一巻こそ故郷にて。舅殿より伝へし印可。今よりそちに返し譲る。日本帰り八重垣の。流義を四方に弘よと。いふに不審と打守り。ムウスリャわたし計帰国させ。お前はやつぱり韓土に。ヲ日本へは再び帰らぬ。ェ、。扨は在陣の徒然にうさを忘るゝ閨の伽。韓の女に馴染てなじみ

の女房を振捨。異国に足を留る気か。聞へぬ男の心やと恨み託てば愚や女房。コリヤ戦場に妻子を忘る。何条色に溺るべき。我日本へ帰らぬ子細。一通語て

（５４ウ）

聞ん。此度朝鮮征伐大将始め士卒迄。武門に列する晴軍。先を争そふ所軍勢。おの〳〵心筑紫潟船の纜時を経ず釜山浦迄着岸す。元より我は山賤の。素性いやしき毛谷村六助。諸侯の懇望有難くも。久吉公の御感に預り加藤の臣と成たる面目。貴田孫兵衛が初軍。和漢に秀し誉れを顕はし。名を後代に残さんと心に誓ふ折より討死せんと極めし某。数度の合戦味方の勝利。分骨尽せし甲斐有て蔚山の籠城も正清公に成変り。大明朝鮮の百万騎を。敵に請たる武道の大慶。然るに此城兵糧乏しく。水を

（５５オ）

絶れし。難義の籠城。死を決すべき時節到来。三日前の戦ひに我一人切て出。明韓の百万騎を打破り。追退けし故にこそ。今日迄も全き此城。其時の力戦に。敵の万弩に射すくめられ。必死の深手是見よと。肌押開けば引巻し。緒も血に染から紅。見るにお園は目まくらみ呆でいつそ正体も泣も泣れずうつとりと。涙も出端を失へり。尋常ならば其傷にて。落命すへきを生延しは。主命守る此城を。保さん為の我一心。此三日の其苦しみ。鏃の数は肉に残り。骨を砕し鉄砲の玉は五臓をつらぬきて。中宇に散ずる魂魄も。忠義と強気に留る体。今そ此身の絶体絶命。貴田孫兵衛こそ朝鮮にて。美名を顕はし討死と。

（５５ウ）

末世の記録にしるされなば。眼鏡違はぬ師の恩を。未来へ報する覚悟ぞや。去ながら此一巻。異国の土と朽せん事。心苦しく有つるに。崇祭りし彦山権現。誠心感応有けるか。ふしぎに万里を隔たる汐路を越て来りし女房。其甲斐もなく討死の。覚悟極めし此身とは。薄き夫婦の契りやと。思へはくらむ胸の内。必死の深手に屈せぬ孫兵衛。ひるまぬ勇気も眼の中にはら〳〵〳〵と散涙。是ぞ無量の。歎きなる。妻は前後も弁へず。深手の夫に取すがり。袖の結ぶの縁有て。まだ見ず知らぬ其内に。亡父上の云号。敵を討しもお前を力。嬉しや妻よ夫よと。いふ間さへ程もなふ別れにやならぬ軍のお共。同じ国でも有事か

（５６オ）

千里を隔つ唐土の。山のあなたに立雲を。明暮恋しなつかしと。三年の月日泣くらし。目出度凱陣遊ばさば。百年も千年も連添内どふかふと。コレや、産事迄楽しみにかぞへて待た女房の心。少しは思ひやりもせず。忠義一途の百分一。妹背の事も露計。心にかけて給はらば。斯いふ事も有まいもの。帰朝せよとの此お使。悦びいさんで乞望。女の際に遥の。海山超て此国へ此討死を見やふ迚。わしや。〳〵〳〵。〳〵〳〵来ましたかいのと声を上。もだへ叫びし有様は。異国の山の雪解し鴨緑江の水倍も爰に。増りし涙なり。道理を思へどあらゝか。ヤァ歎きの内に隙取て。敵寄来らば犬死し忠孝共に失ふ所存か。

（５６ウ）

未練至極と呵り付サァ是よりは氏政が。毒手の種を絶計と。一間に向ひ高声に。最前の謎の判断。承わらんと呼はれば。ヲ、其返答見てたべと。声さへ薄き唐紙をあけに染なす錦夫人。喉ふへ貫くヒ首の剱。見るに遉は女気の何人成がいたわしやと園が驚き孫兵衛も扨はと心に。感ずる計。のふ倭人韓日本も姫ごせの。立る操は同じ事。夫を慕ひ此国へ来る人さへも有物を。夫に引かへ自は。君に離れて日の本の。仇な仮寝の手枕に此身を穢す物ならば。韓の女は妹と背の道を知らじとさげしまれんとはいへ詞を立ずせば。囚れ給ふ宮々の。身の上いかゞ。

（５７オ）
成なんと千に砕し身一つを。和韓に立る自害ぞや。錦夫人こそ日本の。武将の
詞を背きし故。正清の鑓先に。貫かれ死したりと。伝へて下され去にても。恋しき
君やなつかしの。二人の宮に今一目逢ふての後に死たいと。せき上給へはほとばしる
血汐にまじる御涙。珊瑚の枝に水晶の玉ぞ散しく風情なり。ハヽァ遖々。
遉三韓国の夫人にて有けるぞや。仁義を守る主人正清。伝へ聞なば宮々の。
御為悪しくは計らわじ。御安堵有と孫兵衛が。詞嬉しく錦夫人合す御手も
合かたき。君も我子も数千里の。あなたと心の。御別れ。察する夫婦も諸
（５７ウ）
共に。哀れ数そふ後よりぬつと出たる大館軍蔵ひらめく剱夫人の首。はつしと討
てつつ立は。ヤァ我主人より預る夫人。自害の上とは云ながら。首討し所存いかにと詰寄れば。
ハヽ、ヽおこがましや孫兵衛。侍らしく名乗ども。元は匹夫の毛谷村六助。合点行
ずば云て聞そふ。生ておらば連帰り餌に飼ふ錦夫人。自滅したれば此如く首を刎し
は主人へ土産。此首正清が討たりと披露せば。軽ふて勘当重ふて切腹。何と
肝が潰れるか。ムウスリヤ推量に違はず北条氏政。三韓へ内通して。国に止り変
に乗じ。殿下を討んず工よな。ヲヽ某上使に来りしも。朝鮮にて反問の行ひ。異国
（５８オ）
の大軍一手に成。在陣の諸大名討死さする主人が謀計必死の深手見届
たれは。最早くたばるに間のなき孫兵衛。城内の変たつた今。寄手へ知らす相図
を見せんと。持たる鉄丸投付れば。一煙空に翩翻と■■中に赤白の。籏を目当
か城外に。どつと上たる鯨波。城のくまぐ欠出る忍び。追手の方にも込入大館。中にも
総兵鈍面会。真先に大音上。ヤァく孫兵衛。最早城兵逃失て。残るは汝等覚
悟して。首を渡せとひしめいたり。孫兵衛動ぜずコリヤく女房。元より期したか我
命。快よく一戦して。数千丈の此谷こそ。屍を渡さぬ我最期場。汝は一方
（５８ウ）
切破り早立退と夫が詞。イエく高の知たる髭唐人ツイ追ちらして来る程に。夫迄
必討死を待て〳〵もせわしき中。そりやこそ落人遁すなと。しきつて下知する
鈍面会。ホヽ。ハヽ、手並はさつきに見やんす通り。男出立を引かへて。今は女の独武者。
ならは手柄に留て見やと。なぐり立たる太刀風に。コハ叶わじと軍兵共。逃るをやらじと追立
行。心安しと孫兵衛が。サァ斯ならんだうづ虫めら。一々に鏖。討死の先懸させん。
イザこいやつといふ間もなく。ソレ討死と軍蔵が。口は立派に居計ひ武音〳〵と唐
人共。切てかゝるを孫兵衛が片はし掴んて人礫。前なる谷へ落し穴。ばらり〳〵と投込ば。
（５９オ）
半埋るゝ千仞の底も平地と時の間にはげしかりける【三重】働きなり。一世の怪力見ごりもせず。左右に
軍蔵鈍面会。切込二刀を打落し。両手を延て取て引寄。うぬらも冥途の道連と。しめ
付〳〵小脇にかい込。加藤の忠臣貴田孫兵衛最期の様を是見よと。呼ばる一声其
侭に。かばと飛込谷水の天晴なりける勇者の有様。程なく乗入朝鮮の。都督と
名にあふ世留統師。打またがつたる馬の背も。たわむ計の其骨柄。城中響くうな
り声。我計略に陥て。城将貴田孫兵衛。討死せし上からは。残卒全たからざる此城
一人も残らず逃失つらん。ホヽく。ムヽハヽ、。気味よし〳〵敵の跡を追討に。釜山浦迄切て
（５９ウ）
出。小西の荒者鬼舎官。首引抜んは案の内。直様日本へ押渡り。賊将真柴

久吉始め。人種尽して勝鬨上ん。勇めや〳〵者共と。にらむ眼は大陽の。空にかゝやく
人見の光り。鬼髭左右に随ふ大軍。遥の岨より大音上。ヤァく世留統師
確に聞。貴田孫兵衛是に有。深手と見せしは此如く。鼠を集めん我計略。
城を立去置土産。受取やつと詞の内。兼て仕込し国崩天地に開ば蔚山の。城中
一挙の焦土となんぬ。隠れ待たる女房お園。まんまと首尾能ふ孫兵衛殿。手柄は三国
一番男。ムヽハヽサァ嚊おじやと打連て。夫婦が殿水いらず。異国に誉蔚山を跡に。見なして帰り【三重】ける。

（６０オ）

第七

命ある限りは絶ぬ物思ひ。積れば軽き小笠にも。しのぎ。兼たる白妙の。雪の
素足も紅井が替らぬ色の常盤之助。爰やかしこに日を暮し。夜や曙の御方
を御供なして両人が。諌め。申せど中々に尽し。涙の。御歎き。哀れ昔の花の春紅
葉の秋の御遊には。七重八重なる鉤簾の内。今は一重に賤の女を。移す
所体のしどもなく。風にそゝけし黒髪の。櫛さし直しかき撫て。袂鏡にかげ
見れば。見かはす程の旅臘れなふおもなやと袖覆ふ。屏風岩ほのさゝ

（６０ウ）

れ道。四十八瀬も漸々と。渡小浜を打過て。昆陽野。里に三人が暫らく。休らひ。
イみぬ。常盤之助手をつかへ。習わせ給はぬ旅路と申。殊更積る雪道にて嘸
御労れ候わん。しばし是にてお休みと。紅井諸共かしづけば。ヲヽ嬉しき二人の志し。
ほんに仇には。思ひませぬ。自よりはそなた衆の。習はぬ歩路もいとひなく定めし
いぶせふ思やらふと。互ひにいたわる主従が。哀れは旅にとゞめけり。イヤ申常盤之助
様。爺様の居やしやんす神崎へも近けれど。今日は大領久吉様。浪花御遊の御
通り筋。最早還御に間がない迚。行先〳〵は皆人留。悪い折ではないかいな。サイノ

（６１オ）

斯いふ事なら此跡の。村はつれを頼んたら能かつた物。ホンニナァいつそ跡へ戻らしやんせぬかいな。イヤく
宿屋でもない所。若留ねば又難義。そんなら私は一走り往て頼んで見ませふ。其間に暫し
お休み遊しませ。ヲヽよふ気か付た。怪家せぬやうに早ふ往きや。心得ましたと云捨て。
草臥足もかる〳〵と。元来し方へ走り行。雪は次第に降しきる。吹雪をよけて。藪かけへ
打敷しとね菅蓑も。今は憂身の綾錦と。心尽していたわりける。指傘にふゝ
き凌げど払われぬ。頭に積り雪道をとぼ〳〵歩む五郎助が。向ふへどや〳〵百性共。
ヲヽ五郎助殿。年寄て雪降に何所へ行しやるぞ。ヲヽ仁作殿。次郎七殿。大領様の御成

（６１ウ）

に付。役にさゝれて出やしやつたの。ァヽ寒いに太義じやのふァイ。イヤモ何が。御行烈を拝むてゝ
在々からの人群集喧嘩のない様火の用心。掃ても跡から積る雪かき追るはの。盛
砂のと。上へを下へと騒ぎます。ガ大領様といふお人は。きつふ出世を仕た御人おいらと同し百
性から。天下取迄経上た苦労は大体じや有まいのふ。ヲヽサ仁作のいやる通り。親はしんど
する子は楽すると。京の聚楽の関白様余り栄耀が持あまり。親玉の大領様を。調
伏とやらちやくぶくとやら。御謀叛が顕われてコレ聞やれ。あの衆の御身の上で。あられも
ないれそじや有たといのふ。サァそふいふ噂じやが定かいの。ヲヽ定も〳〵本違ひなし。まだ

（６２オ）

其上に付家老の。ァヽ何たら西の宮でもなし。ヲヽ夫よ兵庫の頭とやらいふ人。あんまり異見
をさしやつたが落度。此お人もお手討とやらで死なしやつたけなと。所縁が傍に有ぞ共。
知らぬ高声こなたの二人ヤァ扨は君にも御生害。兵庫の頭も死しやつたかと。驚く

両人こちらには。何にもしらぬ百性共。ァ、くィャくあんなお衆の身の上より。こちとがから
だはやつとましじやの。ヲ、テャ。サァ次郎七おじや往のふ。五郎助殿往てござれ。ヲ、そんなら
早ふと三人は。西と東へ別れ行。曙御前は正体なくなふ情なの世の有様。斯あらせまい
計に自のみか兵庫の頭。色品かへて御諫めも終には耳にさかしらな。仇名に沈み給ふ

（６２ウ）

とやあたら御身をやみ〳〵と。苔の下露霜雪と消果給ふか悲しやな。斯吟ふも何卒ぞして
産落した其若を。御目にかけなは御心も又和らぎもせふ物と。夫ばつかりを楽しみしも。思へはは
かなの御最期やと歎き給へは重房も。君の御運と我身の業。思ひ合せて無念の涙。父
が最期も取交て。凌き兼たる雪しまき空もみぞれと成なまし。折から来かゝる討手の
大勢。夫と見るよりャァく二才め。御尋者の久次が御台所。此方へ渡せばよし。異義に及はゞ二
人共首を取んと罵たり。御台を後に常盤之助。ャァ身に覚へのない事云並べ。慮外ひろ
ぐうづ虫めら。さらへ立せば目に物見せん。ヲ、物な云せそ討取と下知に随ひ切付るを。心得

（６３オ）

手練の重房が。多勢を相手に切廻れば。詞にも似ず逃出す下部何国迄もと追て行。戻り
かゝつて五郎助が逃るも危ふき一筋道。コリャたまらぬとさしあしに忍ぶ。藪かげこなたには。残るひあ
いさ曙御前。コレく長追仕やんなと。気をもむ向ふへ又大勢。何国へ逃ん方角しらず。そこよ爰よ
と見廻す内。それ遁すなと聞ゆれば。何国へ忍ばん小隠れも泣々見やる後の藪垣。雪の重
さにたわむ竹。コレ幸ひと諸手をかけ。取付。大竹即座の気転。どつこいやらぬと下部共。さゝゆる拍子
雪ちつて。延ればぴんと直成竹の。起るはづみに藪の内。向ふへひいわり遠近の行方知れず成給ふ
数多の家来口あんごり。何でも此藪此内じや。さがせ〳〵と大勢は跡を【三重】慕ふて。尋ね行。常盤

（６３ウ）

之助は大わらは。取巻多勢を切抜て。帰れど御台の御行衛も。ャァく〳〵敵一方と思ひの外。最早
追手に奪れしか。ェ、是非もなやとかけ出しが。ィャくく。若今の間に女房が御供せしも計
られずと。西よ東とかけ廻り。御台様ィのう。女房やいと。声もほのかに夕間暮。遠目に
夫と紅井が走り戻つて。コレく〳〵気遣わしいお前の其形。ヲ、思わぬ追手に出くはし。
確に御台は敵の為に。ャァくくく。ソリャマァほんかと立たり居たり。うろ付紅井夫も半乱。
ャァ程は行まじぼつかけてと。駆行向ふへ一人の下部。どつこいそふはとさゝゆるを。■ふ力に
片足切られ。うんと倒るゝ其隙に。女房来れと一さんに元来し方へとかけり行。人の愁ひ

（６４オ）

は白妙の行来とたへし。堤がけ。姿を隠す蓑笠もあらはに漏る瞳の光り。心を
配る曲者か一本の元に立留り。フムァノ一群の松原より。北に続きし堤こそ。殿下
秀吉還御の道筋。是より僅五六町。我年来鍛錬せし。南蛮流の忍び鉄
砲。筒音隠す秘術の玉薬。目当違はず只一討。四海に赫々真柴が武威
も。今ふる雪に埋でくれんと独笑。かたへは君が御帰館に星とつらなる高提灯
切れ間絶間も並松の。梢にきらめく御供の備へ。緒家の定紋おり〳〵と。手に
取如く見へければ。フム前野植原四つ目は佐々木。松田白川立五の印。五三の

（６４ウ）

桐は必定久吉。面白し〳〵。日頃の本懐覚へよと狙ひすまして手練の火ぶた。切て
放せば忽に行烈乱れ騒ぎ立。ハテなむ三宝。武運つよき猿冠者め。コリャ此
手ても行かぬわいの。方便を以て館へ近寄。折を窺ひ真二つ。そふじや〳〵と
大胆に歩む向ふへ。あまたの組子。スワャ曲者こさんなれ。ソリャこそ見付た遁
すなと。取巻多勢事共せず。抜つ潜つ早速の電光。目さめし

かりける【三重】はたらきなり。捕手は次第に荒手の人数。さしもの手垂も猛勢に取籠られてたゞよふ所。捕つたか切つたか鯨波紅白。雲と【三重】ふりかくす

（６５オ）

第八

うかれ女か。里の昔の化粧水名のみ。流るゝ神崎川。渡し守の五郎助が齢かたふく埴生の小家。破れ。籬きをこて〳〵と結ぶ縄ぶし。竹のふし。是も世渡る憂ふしなり。五郎助殿内にかと。敷居越るもはちかりし。また隣のいけず婆々。そも元日から大晦日迄。いかな事休まぬ人が。此頃は渡し舟もかいほつて。毎日〳〵出歩行て居やしやつたが何ぞ能金儲けでも有ての事かと尋れば。サレバイノ。渡世を打やつてかけ歩行たも。やつぱり貧乏がさす業。併何所擲き廻しても

（６５ウ）

出来ぬ物は金。僅な借銭で六畳敷の。大きな台所が崩れかゝる。ヤ垣の損じを繕ふて居るから。得構ひませぬ。煙竹でもまいりませと。脇目もふらず一心に直ぐなる。竹をゆい付る。ハテ扨夫は気の毒なと。いひつゝそこらうつそ〳〵。見廻る度にばら〳〵と。裾袂からこぼれ梅拾ふてほふばる美淋糟。麦歯でほち〳〵コリヤ奇妙。廿弐文の紐の利目。虫めがばら〳〵こぼれ梅と。ひとつ成て落おつたを。おりや喰たそふな。ハヽドレ口直しにお茶一つと。遠慮生木のくすぼり囲炉裏。あたりへ風が散せし色紙。つゞれの袖に。まけ根性どぎつい煙竹。吹付て。ヤレくよい

（６６オ）

出ばなでごんした。渋茶の礼には昼飯の。さいらさよりを進ぜましよと。魚さへ二つ名の有婆々ひとり。しやべつて出て行。朝の夜から引牛の背や。伊丹酒引かけて。向ふ見ずの牛子共。コレ親仁殿。一はい呑して貰ふぞやと天窓で明る暖簾の。縄くらひとは見て取てヲヽ煮売しでも大事なくば。鑵子ぐち呑でいんだり。イヤおいらが呑たいはきすしや〳〵。ムヽコリヤ新米の悪鬼共じやな。よふ目を明て物をいへ。渡守の内に酒は売ぬ。近所に沢山な煮売売屋。わいらが銭の有だけ。思ふ存分呑だがよい。ヲヽ爰になけりや外へ往てもやらふが。其代りには酒手をせふかい。イヤ馬駕籠に乗はせまいし。酒手

（６６ウ）

乞れか覚はないは。ハテげい〳〵しう隠しやんないの。夕部わり様は。まぶな代口物引かけて戻らふがの。びりに売たら何でも大金。サア分口おこせ取のじやと。泥脛ながら楊り口。踏あらしてもいかな事。しろりと仕たる丈夫さに。ゆすりかけては見た物の今更何と嶋原の。くつわが。いきせき。コレく親仁。是程尋ねても知にくいふけり者。親の内へ来いで何所へ行ふ。今日は是非も家捜しすると。かけ込向ふに立ふさがり。コレハ扨。悪い了簡。マアよふ思ふても見さつしやれ。一旦の困窮を助かつたも。娘を売た金なれど。こな様が抱へて呉たればこそ。今日迄の露命をつないだ。

（６７オ）

其恩の有親方とのを■にして。肉親の者なれば迚。隠して置よふな親じやない。斯云内にも来おつたら。引捕へて手渡し仕ます。夫共又聞分なくばハテ何とせふ。心任せに家捜しさつしやれ。おれも以前は錆刀も帯した者。年寄た迚五人や十人苦にはせぬ。討果して潔白見せると。すはりし眼中気味悪く。イヤコレイノ聞分まいじやなけれ共。こちの迷惑も思ひやらしやれ。何がめつたやたらに捜し歩行も四月五月。ホンニ夫よ。紅井太夫が腹も丁と十月。ヤア何といはしやる娘は孕んで居ますかの。サイノお山のろつふくは栗栖野の竹鑓同然で。突留人は分らねど。目当は間夫の常盤之助じやわいの。イヤ是々そちのせりふよりこちが先じや。

（６７ウ）
きり〳〵分口おこさぬかい。ィャ儕等がよふな無法者に。相人に成隙はない。ェ、けたいなひんこめ。呉ずは儕を貰ふのじやと。掴む肩先雲雀骨。ィャ舞あがるなと身を沈み。
両方一度に打返せば。口にも似合ず鼻頬かゝへ。もふ〳〵御免と牛子共。逃る手並にくつはが恟り。こちらは馬に縁が有。此上踏れて何とせふ。ァ、能い刎じやと投首し。舟橋をさして。急ぎ行。気は壮年に替らねと。六十遥に腰痛み。心の辛苦のし兼て。ちと気ばらし
と表に出。見廻す西の畠道。所目馴ぬ二人連。ャァひあひや。確に娘で有ふ物。此人絶
の其内に早ふ来よかし歩めよと。いふもあせるも我独。二人漸々門先へ来るを待兼引
（６８オ）
入て。戸口を丁ど三人が。物も得いわず一時に肩で。息する計なり。紅井胸を撫おろし申
とゝ様。定て私を廓から。捜しに来たでござんせふなあ。おいやい。去年の冬から月に二
三度つゝ。今も来てめつきしやつき。まそつとの加減で浮雲い事。とふに便て来そふな
物と。待ど暮せどいかな事。せんほう尽てうろ〳〵と。当途なしに尋廻る悲しさを。思ひやりも
ないやつと。恨んで居たれど顔見たら。立た腹は何所へやら嬉しふおじやると。ほや〳〵機嫌。見れ
ば心もくれぐと。十二の年から廓に育ち。八年ぶりで親里へ戻るはれなき関破り。もし
便たらとゝ様に。御難義かけるが勿体なさ。ャレあほうよ。戻らにやよいはで済ふと思ふか。
（６８ウ）
おれに難義はかゝるまいか。年端が行ても其様に。しどのないが覚束ない。そふして連立て
来たは。噂に聞及んだ。常盤之助様とやらでござるかのと。尋られて面を赤め。成程拙
者常盤之助と。名乗も面目なき仕合せ。息女紅井とは。互ひに末の契約を致したれ
共。其元に赦しを請ざれば世間晴ず。今日推参致せしは。此義を願ひ申さん為。世になし者の
某でも。望まば婦妻に下されふや。ヲ、く何が扨。よく〳〵の縁なりやこそ。ふつゝかなやつを
夫程迄不便がつて下さる物。進ぜませいて能い物か。先取あへず祝義を。神棚
の神酒徳利取繕わぬ中がさに。汲かはしたる献々も。積らで消んあは雪の。薄き契り
（６９オ）
と観念し。コリャ女房。今こそ誠の夫婦となり。願ひ達成せし上からは。詞をつがい置たる通り。此世
の縁は是限り。来世は一蓮托生ぞと。いふより早く差添を。抜手にあはて取付紅井マァく
待て下さんせ。ィャ〳〵。得にも生害すべかりしを。暫らくそちが望に任せ。二世の盃致したて
ない。願ひ叶ひし物ならば。必留るな。留まじと。誓言を立しを忘れしか。サァく〳〵其誓言は忘
れねど。夫婦と成たしるしには。せめて半年。一年でもならふ事なら存命て。添いとげて
下さんせわしや。何ぼでも殺しはせぬ。とゝさん留て下さんせと放さん気色はなかりける。
ャイく狼狽者声立るか。今迄とは違ふぞよ。モウ侍の女房じやないか。品に寄
（６９ウ）
たら男の介錯でもせにやならぬが。聟殿。こな様又死ねばならぬといふ其訳は。サレバ亡君
久次公の御台所。御供致せし路次において。追人の者にやみ〳〵と。奪ひ取れし申訳。ハテのふ。そ
りや切ざ成まいが。シテ御台所は御落命でもなさんたか。ィャサ其義は。ハテ扨不埒千万。尤切
腹さしやつたら。草葉の陰の御主人へは言訳が立にもせよ。若御台所御存命で。やはり此
世にござるならは。こな様冥途からかけ戻つて。云分が出来ふかの。ァ、若い〳〵。娘悦べ。聟殿の
命気遣ひないぞ。トレ落付してやらふかと。相図の手拍子うちよりも。障子をそつと曙御前。
立出給ふを見て恟り。ハ、、存じかけなき御拝顔。面目もなき仕合やと差うつむいて詞なし。
（７０オ）
ヲ、常盤之助紅井も安堵しや。主が情に危き場所を遁れて爰に忍びしぞと。仰に五郎助

頭を下。何が昨日昆陽野の里てのもや〳〵。行合してともに狼狽。迯込藪の中は真黒黄
昏時。あいろ分ねど小袖の手障り。只人ならずとお救ひ申。畦道。近道。案内は知つ。足に
任せてかけ戻り。様子を問へは尽せぬ御縁。此親仁が為には大恩の古主。秋篠中納言殿の御息女
様の。私めは御家の雑掌。松崎丹下が馴の果と。物語る内外面に足音一目いぶせじいざ
あれへと。隠す間もなく表から。五郎助殿内にか。地頭からこなたを連て来いと。庄屋殿迄
呼に来た。早ふ〳〵ヲ、そりや合点じや。大方島原の親方が。娘が事を届けたので有ふ。ハテ

（７０ウ）

仰山な。金さへ立りや済事じやと。聟や娘に気扱ひ。使大義でござるのと。後めだくも
連立行。大領の御諚ととなへ。氏政が手の者数十人銘々弓箭手挟で門の戸どふど
蹴破る音。コハ何事と常盤之助。追取刀にかけ出れば。矢襖作つて取巻たり。待た〳〵と
畳の楯。手向ひは仕らぬ聊爾有なと押沈め。此所へ何を目当の此狼藉。承はらんと云せも
果ず。某は北条氏政が家来。矢代文平といふ者。咎むる儕は先何やつ。イヤ拙者は則此家の
聟。然らはよつく承れ。久次の御台かくまひ有事明白たるによつて。親仁めは地頭方へ呼寄。主
人氏政直の糾明。此文平は跡へ廻つて家内の吟味。併孕みし忰。女子ならば。助くべし。男子

（７１オ）

ならば首討よと。大領の御諚成はと山頂は平下し是は思ひも寄らぬ御詮義。久次公の御台とやら。何
所縁有てかくまわんやコリヤ叶はぬむだ言口叩くな。三行散しに書たる色紙。御台の自筆に相違
ない。隣家の老女此家にて。拾ひ取しと慥な注進。まだ此上にもあるがふかと。差付れて
動転し当惑ながら思案を極め。斯證証の出る上は詮方なし。いかにもかまひ罷有。御台所。
御懐妊も臨月なれば。御平産有迄の御用捨なされ下されたし。ヤアべん〳〵とへり出すのを待べきか。
腹裂破つて早く渡せ。スリヤ胎内を切あばけよと父君の仰成か。ェ、浅ましき御所存やと拳を
握り居たりしが。よし此上は力なし用意致さん其間。暫らく開き下されんや。ヲ、譬迯去んと工む

（７１ウ）

共。鉄桶の如く取囲めば叶はぬぞよ。今宵八つの鐘を相図に再ひ来つて受取ん。夫迄は猶予致し
くれふはと。赦せど赦さぬ。詞の尖り矢つがふて。こそは立帰る。跡は十方に暮る日と。共に傾く武
運かと。心たゆたふ老の波立帰る五郎助が。前後を囲はせ斧桐万蔵。ヤイ親仁め。儕御前にて
請かひし通り偽りはないじや迄。イヤ何しに虚言申ませふ。よし偽り迯走りたふても。出口〳〵の御同勢一滴
の水も洩て出べき方なければ。イヤモ御念には及ばぬ事。ヲ、然らば遠ざけ得さすべし。■せよ早くと
云渡しもと来し道へ引返す。心いらてば足取も。とつかは我家に走り込ヤレ聟殿。嘸待兼。定めて
内へも詮義の役人イカニモ多勢込入。久次公の御胤を渡せ何と厳敷権威。ム、そふ有ふ

（７２オ）

何か地頭の方で大勢に取まかれ。糾明はせられたと存せぬ知ぬと云募り。サァ遁るゝたけわと
拙者めも。ヲ、おれも負ず劣らす争ふたれど。情なや御自筆の色紙を證拠に責付られ。
サ、私迚も。差付られて気も散乱。子貢か才でもイヤモ富婁那の弁ても。いつかな叶はぬ手詰と成。
ェ、口惜ながら所存を極め。此家にかくまい申せしと。スリヤ聟殿にも。アノ舅殿も。ヲ、白状を仕ましたと。詞の
割符両人が胸に哀れを押包み。いて此上はと立上り。売残したる長持のそこ爰捜し
取出す。煤まぶれの二腰挟み。斯帯刀致せは以前の如く。秋篠家の雑掌松崎丹
下。改めて。頼みたき子細有。イヤ拙者もこなた様へ。折入ての願ひ有。ム、シテ其様子は。サァ外なら

（７２ウ）

すあの紅井。女房に申請しとは云ながら。こなたといふ慥成親有女。子ながら其元に遣はしたてはは
れつきと仕た夫の有身。親のかうけに成へきか。男の自由に致されふか。とは云なから。主人の為と
有ならば塵埃より軽きは一命。ヲ、大盤石より重きは忠の一字を守るが武士の。常そと

思ひ明らめて。御台所の身替りに聟殿立て貰ひたい。ｻｱく拙者か願ひも其通り。ﾑ、然らはこなたの手にかけ。ｲｬく御親父の御手にかけ。此世の因果を切捨て。未来を助けて下されかしと。聞より大小投出し。尻へにごふと腰抜し。ｴ、胴欲な事いわしやるのふ。魚てさへ生て居る物に。むこたらしふ刃物は当にくい。まして血を分たこの我子の腹が。裂れそふな物と思ふて下

（７３オ）

さるかいのふ〳〵。ｴ、斯云内にも産て呉れ。女の子なら親子の命助かる物。広い日本国中の。何国いか成神成共。此大難を救ふてたべ。守らせ給へと立つ居つ。親と夫の苦しみを。見るめ涙に紅井がしほれ納戸を立出れは。右と左に寄すがり。女房。娘。最前からの一部始終を。ｱｲ。残らす聞ておりました。お主や親の為といひ。取分て大切な男の為に死ぬのじや物。何の命が惜からふ。ｲｬそんならわりや。得心して死でくれるか。死ぬる気かいやい〳〵。ｱｲ。よふ覚悟極めておりまするわいな。ｱ、親子迚死だお祖母によふ似た気性。男勝りな健気者。出かしやつた。出かしたなｱ。命を捨て某か忠義を立させくれん事。女房とは思はれす弓矢の神かと

（７３ウ）

計にて。顔見合せばこらへ兼。一度にわつと声立て。取乱したる悲しみを。聞に堪兼曙御前。一間を走り出給へは。五郎助既て小脇にかゝへ。ｺﾚく七十に及んた此親仁に。不忠の名を取しよふ迚。邪魔さつしやりますか。ｲｬくく君を先立参らせて頼みなき身は惜からす。必々紅井に過ち仕やんな常盤之助。ｺﾚﾊｻﾃお前の身は惜みはさつしやるまいなれと。腹なお子は誰胤ぞ。よし平産なされてからが。男子ならば叶わぬそや。のめ〳〵と切殺させ。あの世にこさるお連合へ。何と言訳さしやますぞ。娘夫婦の者共は。ｿﾓ生て居られふと思はつしやるか。懐胎仕ては目にさへあしい色を見ず耳に悪

（７４オ）

声を聞ずとはいわぬか。何事も目をつぶり。聞耳潰し。気強ふして居さしやませと
あせる御台を押入の戸尻に小柄しつかりと。差向ひたる妹背鳥。申常盤之助
様。おなかなやゝが男の子なら殺される。女子になれと祈つてたべ。夫がせめての刀草。
ﾖ、譬男の子にもせよ。今更未練の心を起し。臨終正念うろたゆるな。ｱｲ。思へばはか
ない私が身の上。嚊さんには八つの年死別れ。たつた一人のｱﾉ。とゝさん。達者な様でもお
年の上。さま〴〵との。気扱ひに。病が起りはせまいかと。案じられます案じます。又一つ
にはお前に事。君の身じや物寡では居もなさんすまいし。置もせまい。どの様な

（７４ウ）

女子がそくなかそふ共。女夫にならふと云様な。約束や抔仕て下さんすなへ。わしや死
んでもやつばりお前の女房でござんすぞへ。ﾖ、御台所の御先途を見届けなば。いかなる
僧をも師と頼み。そなたの菩提を吊らふ心底必らず迷ふてくれるなよ。ﾉﾌ其
お詞が未来へ土産嬉しふ成仏するわいなと。夫にひしと取すがる。花の姿を今
の間に。ちかすや夜半の風につれ鐘ぞ。無常を告にける。ﾊｱ悲しや。娘が最期も
早一時。頼むは仏の御力と。立や畳の目も泣はれて御明しの。影にまばゆき後光佛。
偏に願ふ法の道。あの世此世のせつば際抜放したる差添の。此剱難に妻や子

（７５オ）

か。かゝるべきとは夢にさへ。思ひもあへぬ思ひの闇かき暮。てこそ見へにける。ｺﾘｬ娘。是は
先祖から伝わつた作仏の地蔵尊。六道能化の菩薩なれは。よふお頼み申てな。極
楽へ往てくれいよ。訳ては又腹な子が。さいの河原で迷はぬように。願ふてやれと
戴かすれば。手を合せ。刃を待たる其有様。身をねぢ背け爺親は。むせぶ涙を
呑込で。ﾊ、ｱ誠にそふじや。和讃にいふて有通り。飢に望んで子を喰ふとはお

れが事。餓鬼の思ひぞ哀れなる。なむ阿弥陀仏。なむあみだ。南無あ
みだ佛。なむあみだ。ァ、此様な憂目を見るも。長生仕過た罰であらふ。

（７５ウ）

おれが様な因果人の。未来は無限集熱の。炎に入ん悲しきよ。業に引るゝ。魂魄
を。導き給へ地蔵尊。南無阿弥陀仏なむあみた。南無阿弥陀仏。なむあ
みだ。南無あみだ仏と胸をすへ。立寄て紅井が肌押明ればはかなやな首に懸し
は子安の守り。子は死して生るゝ共。母は息災延命と祈りしは誰為ぞと。夫の歎
きに紅井も連て。心は乱るれど。申。手をふるはしておなかなやゝに。疵ばし付て下さんす
なと。命待間も子を思ふ。心の内のいぢらしさ。よしなき我に繋がれて斯苦しみの
死を遂る。そなたも因果。此身も業。女房の腹を切裂て。生れぬ忰を引出す。

（７６オ）

例は昔の悪王と。おれ計じやわやい。哀れ拙き。われらかな。後世を恐れぬ。はかなさよ
南無阿弥陀仏。なむあみだ。南無阿弥陀仏。なむあみだ。ェ、口惜しい。遉女子の
はかなさは。刃物の光りが目にかゝつて気がおくれる。もふ物思わせて下さんすな。ェ、日
頃に似合ぬ御比興なと。励ます詞に恥入て。眼をふさぎ称名し氷の刃臍際に突
立れば。親はいつそに魂も夢中に成て。南無阿弥陀佛〳〵〳〵〳〵歯を喰しばる
女の苦痛。気を取直す夫は苦患。きりゝ。〳〵と切裂ば。血は滝津瀬に異ならず。
紅深き染緒をたぐり出すが如くにて。思はずわつと叫ぶ声。血汐の中の初声と

（７６ウ）

乱れ合たる哀れさは。鷹に取れし雀の雛。父鳥母鳥あこがれて。啼悲しむも
斯やらん。目も当られず五郎助は蒲団をがはと引かぶり。もだへ転びて泣尽す。親子
の別れぞ無慙なる。血押分て常盤之助取上見れば。南無三宝男の忰。ェ、不便やな。
此世の明り見るや見ず。只一息の間も待で。直になく成可愛やと又も悲歎にくれけるが。
ハ、返らぬ繰言愚なりと。亡骸小袖に引包み繕ふ間もなく刻限ぞと。矢代文平
斧桐万蔵。家来引連つゝと入。見事御台が腹裂たか出かした〳〵。男女の吟味仕て
くれん。小忰渡せとせり立れば。ィャ御吟味にも及ばず。御男子なれ共余りと申せば

（７７オ）

痛はしし。せめては七八才迄私に。何卒お預け下さらば広大成御慈悲と。いひも切せず引た
くり。悪逆無道の久次が小忰なれば。斯の通りと首打落し。さもいかめしく取持せ。肩肘
はつて立帰れば。其侭小袖引退て。ャレ女房よ紅井よと。押動かしつ抱しめ前後正体泣
沈む。親と夫が中心の。誠に解る御座の紐産声高く聞ゆれば。ャァ御平産なされし
かと。其侭かけより押入の戸を押開き見てあれば。実もけだかき若君なり。歎きをしれ
両人は。諌めどつらき曙御前。フゥ最愛やヶ程迄悪縁深き者共が。親子夫婦主従
と成しも前世の宿業か。君が形見の此水子もりて甲斐なき行末やと。さめ〳〵

（７７ウ）

尽ぬ御歎き。常盤之助心付。邪智深き北条氏政むくろの詮義なんどゝて。引返さんも
計れず。何国へ成共御供せん。実尤と五郎助が用意〳〵と立騒ぐ。ャァく旁暫くぞふ小
西行長参着せりと優美の声。かけ烏帽子に花染の素襖の裾を地上にひかせ。
泰然として入来り。いかに人々さのみいぶかり申されそ。卒爾有ずと取静め。久次公正し
からざる御行跡と見へたるも。正敷深き御所存とは我よく計知たれ共。清きを濁す佞
人原。大領の御心をまどわす故。痛はしき御生害猶も御胤を絶さん迚。氏政御臺
の胎内を探る。去によつて我手の吉に身をやつさせ。窺ひ聞ば。常盤之助がかたら

（７８オ）
ひし傾城も懐妊成よし。元より恩顧の其方なれば。御身替りに立るは治定と。見抜し如く安堵せし。某が愚案に違はず。ホヽヲ出かされたり頼もしし。政道の表立からは。誕生の
御子男子迚も気遣ひなし。去ながら世上の聞へ有なれば。常盤之助が忰とし。三浦之助と名付申。河内の国において。若江の地を宛参らせよと。是宇治君の御仰。御安気なされ
下されよと。守奉る若君は。十八才にて戦場に英名高く聞へたる其若武者と知れたり。御臺は死骸に合掌有。忠孝貞女の影に寄。今若君の納りを。見る嬉しさはいか
計り。此大恩を報じたし。行長よきにと有ければ。はつと領掌袖かき合せ。流れを立し縁に
（７８ウ）
もとづき此川竹に水葬し。一宇を築き一基を残し。跡念頃に吊らはんと。詞は今に神崎の。傾城塚の因縁に仏果の種を江坂村。地蔵菩薩を安置せし。謂れは斯といちじるし。
早稲の目に程有まじ。彼地へ御親子諸共に。即刻御入部なし申さん。御発駕なりと呼
わるにぞ。下知を伝へて。御供ぞろへ。一宿せばしと満々たり。御乗物へ二方を。いたわり参らす
聟舅。嬉しさ悲しさ取交て。ひとつ涙のはら〳〵と二月の雪のふり出すお先手大鳥毛。臺笠。立傘。コレハサテナハレハサテナ。目を驚かす所知入に。花を御簾番子小性が。守り刀を持
筒持弓。いさをし。高き武名の誉れ。遍く世界皆。白妙。実行長が智勇の程
（７９オ）
感ぜぬ者こそなかりける
第九
讒佞よく忠を妨ぐ。何者か剛腸其心を式ぎ及ん。加藤主計頭正清。三韓より凱陣し麟閣
の切名空しく。出仕を止て引籠れど。国の政道変りなく邪政を頒つ裁判所降参したる下
官共掾に机を押並べ。手習ふ筆も倭毛に。手本も此土の仮名まじり。叶わぬ物は痃癖の。つかへ
に肩を痛めけり。いろはにほへと。此中は御人下され。覚一金弐万三千両右之通慥に請取申候。しやぐは
ん〳〵きこらい〳〵。コレイノウ狄内殿韃蔵殿■助殿も何ぞいの。又しても〳〵聞とふもないちんべんかん。其唐
音と楷な文字は取置せ。日本風のいろは仮名。教てやれと殿様の御意でわしらは師匠役。サアく教
（７９ウ）
た通り訓誦んで習わつしやれ。サイノウふつつり唐はいふまいと思ふて居てもツイ口癖。したが銀子目や
いろははまどろしい。一筆おもひいくのちらし書をは稽古して。日本の女と色事仕て見たいわいの。アンまだ
てんな徒な。猥な事いわしやると。奥様へ告るぞやと。いわれてぐんにやり顔見合せ。閉口したる舌折から。
襖押開妘立出。コレく下官の奴衆。御前様の今爰へ御出なさる。取ちらした物片寄て次へ立しやれ。早ふ〳〵。
ハッと下官が銘々に。取片付て部屋〳〵へ。打連てこそ入にける。跡て一間を立出る。加藤が閨に咲花の色香さへ
なる寄木御前。妘共が取り取々に。席を設けの座に直り。ノウ長崎片そぎ。新参の下士が手習。指南に
嘸や心遣ひ。殿様にも此頃は異国の御陣のお労にや。聊ながら御不例にて御前へ出仕も遊ばさず。是非なく替る
（８０オ）
詮議の役目ヤアく牢屋の役人誰居ぬか。ハッと諾へて高橋清三。白洲に出て手を付ば。先達て召捕置
たる勝間村瀬戸の藤四郎。とくと糾明致せしか。ハッア種々に責問候へ共。中々白状致さぬしれ者。猶
も此上火水の拷問。イヤく夫は悪からん若責殺さば大切の詮義の種を失ふ道理ハテいかゞにせば
能からふと。奥有胸もさし当る。詮義の小口兎や斯と。思案とりぐ成所へ。下部一人罷出。御上使と
仕て小西行長様の奥方御出なりと訴れは。ハテ心得ぬ臨時の御使。マ何にもせよ此方へ御通し申せ。そ
ち達は皆次へ。サ早ふ〳〵と気配りは。遉加藤が奥方と。容■を餝る襠の衣紋繕ひ待居たる。
程長廊をしとやかに。入来る小西行長が妻と優美の身に負わぬ。弓と矢一手取添へて
（８０ウ）

携へ奥に打通れば。寄生御前謹んで。コレハく関屋様。思ひがけない上使の御役目。御苦労様やとあひしらふ。ホウお珍らしや寄生様。けふし自我君様の御使に参りし事余の義にあらず。加藤正清此程より病気といひ立出仕致さず。世の人口には預りの王子の行衛。又一つには殿下の重宝浪切丸の御剱。今において知ざる故。言訳なさの虚病とサ下々の取沙汰。察する所是迚も佞人讒者の業ならん。清正是を憤り。且は殿下に恨みをいだき。大勇の本心を取失ひ。誤つて疑念を起さば。人と倶に亡ぶといふ古人の詞も黙止がたく。正清が病気の虚実糺せと有我君の厳命也と。さもさはやかに述にける。寄生御前頭を上。ハッア有難き君の御諚。夫に限り義を

（８１オ）

忘れ。何条君をお恨申さん又た。御宝王子の盗賊大方夫と推量違はず。召捕ては候へ共折悪敷夫の病気。是非なく思わぬ遅滞の段。只幾重にも御宥免下されかし。此上いか程讒言なす共。臣か曇ぬ魂は鏡にかけし君の明察。よし又君々たらず共。臣は臣たる忠義の一筋。本意を違ふる正清ならず。ホウ其一言聞上は真柴の御代は益太平。改めて仰付らるゝは。今日の本に身を忍び殿下を覗ふ物有よし。察る所異国の残党。急き誅罰せよとの御上意。則君より下し。給はる此弓箭は。正八幡宮より伝わりし水破兵破の神宝。敵いか程謀る共神力應護の切にて急き追伐致せよと。深き御心籠られし御賜頂戴あれと手に渡せば。

（８１ウ）

ハッア冥加に余る主君の恵み。只此上は幾重にも。御前宜敷御披露と。夫にかはる式臺も。礼義細々相述れば。最早役目も事済ば。関谷は御前へ此由を。スリヤもふお立遊ばすか。病中故に御請さへ。直に申さぬ夫が無礼ひたすら御免と穏に。行義崩さぬ家の目。関谷もおとらぬ襠の。作法正しき爪はづれ館をさして帰らるゝゝ又も白洲に下部一人。謹んで両手を付。科人瀬戸の藤四郎が娘。所の庄屋相伴ひ。命乞ひの御願ひ迚門前に扣へ罷在。いかゞ計ひ申さんと窺へは。ムウ何藤四郎が娘。命乞の願ひとな。罪有者の詮義中。妻子に逢す法なけれど。孝心にめで暫時の用捨。此方へ通れといへ。ソレ者共科人是へ引出せ。ハッと答へて獄屋より引出

（８２オ）

さるゝ囚人の。髭髪鬙と色青ざめ。さながら猛き骨柄も。千筋に搦らむ縛り縄。身の械よりも首枷の。子は見るよりも走り出。のふなつかしや爺様。逢たかつたといふ声も涙にむせび泣居たる。庄屋もおづ〳〵這ひ出て。ハイ〳〵〳〵恐れながら申上ます。則是成娘が義。思ひがけなふ此春より。牢者致せし親の事。暑ひに付寒ひに付。此爺様はどふしてござる。病ひは出ぬか。とふか斯ふかといふては苦に仕。案じては泣。かてゝくわへて彼が母。是も夫が苦に成て。持病の起りつめ。涙片手に其介抱。御医者の薬せんじたり。口に合ふ物煮炊たり。其孝行さ真実さ。近

（８２ウ）

所隣の者共も。往てはほろりと貰ひ泣。余り見る目がいぢらしく。村中寄て申合。どの様な罪か存ぜねと。藤四郎一人助かれば。妻が快気は差置て。娘が心安まる様仕て取らせとふござります。一村の名代として此庄屋。娘を連て命乞ひの御願ひ。何卒罪を御赦免なり。御帰しなされて下さらば有難ふ存じます。コリヤくお娘あなたが殿様の奥様じや。女は慮外御免成。藤四郎の命乞ひ。ソレ御歎き申上ぎやいのと。いふを漸力草。涙の顔をふり上て。思ひがけない爺様のお咎。夫を苦に病嚊様は。夜も昼も泣てばつかり。若や爺様嚊様に。悲しい事が有つたらば。よるべ便りも

（８３オ）

ない私。申奥様。爺様の替りにわたしをば牢へ入。切成と突なりと。爺様御助け有ならば。嚊様迄も息災な。其嬉しさは百千に身を切る々も厭ふまじ。どふぞ情に爺

様の。命お助け下さりませ。御慈悲〳〵と合す手に。はら〳〵涙一時雨血筋の。いとゞ哀れさよ。不便と思へど藤四郎。態とねめ付声あらゝけ。ャァ見苦敷其ほへ頬。惣別人といふ者は。魂しいを磨くが第一。刀をさせば侍と権威で人をおどしても。今の殿下ともてはやす。真柴大領久吉は。小田の天下を掠めた盗人。僅士をこね。世を渡る瀬戸物師。土龍に等しき匹夫なれど。心は武士にも増りし藤四郎。斯

（８３ウ）

捕われと成たれど。覚なき身は恥ともせず。又心涼しけらば苦し共思はぬ。身に取て暗からねば牢屋の内も能ひ楽しみ。此通りをば早ふいんで。嚊にもとくと云聞かせよ。何にも案じる事はない。ャ、、、早ふいね〳〵。ェ、胴欲な爺様。内は内で嚊様の持病の積。お前はつらひ其縄目。悲しい者はわたし一人。どふぞ早ふ言訳して内へ戻つて下さんせィなァ。ャァぐど〳〵と未練のくり言。細言いわずと早帰れと。詞尖どふ言放せば。ャァさな云ひそ藤四郎。唐土廿四孝にも。例し希なるそちが娘。子は子の道を尽せ共。慈悲には疎き無道心。殿下いつぞや難波潟。

（８４オ）

入江御遊の御乗物になぜ鉄砲は打懸しぞ。ャ是第一の御咎。二つには又海に入て潮を払ふ。奇特の御太刀。失たるも必定そちが所存ならん。サ有様に白状せば。死罪は申宥めて呉ん。いとし妻子が思ひを安め。存命ふとはなぜせぬと情の籠る一言も。耳に逆らふ高笑ひ。ハ、、、活つ殺しつ利発な奥様。高の知れたる我々敷。譬黄金で述た太刀にもせよ。奪ひ隠して何にせふ。春の日肘に退屈し。慰打の小鳥狩。妻乞ふ雉子を討損じ。思ひ寄らざる不調法。此外に言訳ござりませぬ。ャァいふな藤四郎。僅小鳥を取らん迚。二つ玉はなぜ

（８４ウ）

込みしぞ。ャァ夫は。ヲ、言訳は有まいがナ。有様に白状せよナ何と〳〵。ハ、、、成程御尤な御尋。二つ玉の訳聞度ば。大領の御前へお引なされませ。久吉公の御傍にて直に白状致しまし。ム、何といふ。スリャ我君に対面せぬ其中は。たとへいか様の拷問でも。白状致しませぬ。ャ責殺しなと引成と御勝手次第になされませと。胸に一物盤石と。身を投出せし。不敵の骨柄。左程にすはりし其方が。魂しい此上は正清公へも申上。昼夜わかたず現つ責。ソレ者共科人獄屋へ引立よと。聞て娘は猶悲しく。コレ爺様。覚へ有らは隠さずと。有様に云はしやんすりや。命は助けてやるとのお詞。嚊様や

（８５オ）

わたし迄案じる心を露程も。思ひやりが有ならば。早ふ戻て下さんせ拝みまする爺様と手を合したるいぢらしさ。ヲ、道理じや〳〵〳〵。ェ、去迚は聞へぬぞや藤四郎。悲しい時は身一つと。憂目からい目見る時はいとしい事と思ふても。懸り合に成のがいやさ。身を除るのが他人の境界。夫に引かへこちとら迄。孝行な娘がいぢらしさ。コレ■三文にもならぬ事。寄合したり事欠てこなた一人の命乞。其手前をば思ふても。そふ意路張た物じやないわいノ。ガまんさら無事お上にも。何の御疑ひ遊ばそふ。有様にいへ助けふと御慈悲深ひおつしやり様。夫にこなたか賽かふて。強ばつた迚

（８５ウ）

誰一人。手柄と誉る者はない。コレ虎狼も子は不便な。女房の泣のも。子の泣のも。何共思わぬこなたの心。鬼じやァ、鬼神じや〳〵〳〵。コリャく娘泣事はないは。ィャ申奥様かふ御暇申ます。サ、娘サァ立や〳〵。何の別にあんな爺。死んだと思へは事は済。われも早ふ十七八に成。我に能ひ爺呼んでやり力ない事村からさせぬ。ヲ、おれ一人でもさしやせぬと。力んで見せる甲斐もなく。慈悲

もなき世の浮言をかぞへ尽せぬ白洲の名残。弓箭の家に引かへて。子を見返らぬ
藤四郎が。心に泣や血の涙。世は忠孝の二つ文字。柵となり関となり。赦さぬ掟
縄取に引わけられて行末は。涙の川瀬。汐ざかいわかれ〳〵の。わかれなる

（８６オ）

第十

さまが寝姿ヤヨカイ見れば。花の一枝誰手折来て爰に有かとヤヨわしや思ふた。声面白く海
士の子が。玉もかるてふ岸影に姫松。重る勝間の里。萍の宿の隣同志■の片との戸ざせしは。
明家かりや片原は。瀬戸物見世の住なしも侘しからねと藤四郎か。召捕れたる物うさに妻は
心も乱れその。ちゞに物をや思ふらん。廻門の方より二三人。連立出る女共申お家さん。今日の
細工の出来上り。見て下さんせと差出す。つくね人形鳥獣■すかしの土細工銘々前に。並
ぶれば。鑓片寄打詠め。ヲ、情が出る故手端も見事。併夫藤四郎殿不慮な事故永の

（８６ウ）

留主。何角仕覚へさんす事。墓が行いで嘸難義。こつちも難義去迚は。いつか牢者の浮伏しを。
赦され帰る浪枕。添寝する夜が有ふぞと涙汲ばとも涙。イヤモ追従でいふじやないが。是
の旦那様唐の土迄取に往て。瀬戸物焼にこつた人。割物に付御咎なら女は第一あぶな物。
よもやそふでも有まいの。サイノお茶子のいやる通り。常から気配のよいお人。牢者とやら聞
きや此世の地獄。いとしい事て有程にの。ヤ兎やかふいふ中暮近くドリヤ。一情出して仕舞ふと。皆打
連て細工場へ。行ばこなたは引寄る秋の野もせの虫ならで。綴れ。させてふ糸よりも。心細道畦傳
ひ。帰るお袖がしほ〳〵と。涙の雨や振袖に。顔を隠して内に入。夫と見るより是お袖。見ればまふたも

（８７オ）

泣はらし。持て行きやつたお弁も其侭。合点の行ぬ事だれけ。あつちの様子はどふで有つた。マ何ぞひよん
な様子じやないか。サ、どふじや〳〵と。母親の。案じにお袖はないじやくり。嘸様わたしや悲しかつた〳〵。
悲しふござんしたわいな。エ、コレ何の事じやいの。シテ爺様に逢やつたか。泣ずと聞しやどふじや
いの。サア達者で居ては居てなれど。手々も後へ括り上。たれと責苦に合ふてじややら。色も
悪し悲しい事の有たけを嘸様。わたしや見て戻りましたと泣子より。聞母親の胸は板。モウくく
いふてたもんな。ヲ、そふ有ふ〳〵。そふで有ふと。むせかへる。思ひはちゝの浮涙果し。歎きの折からに。
隣の寡やげんの鍔六。さす一腰も袋くち内を覗いて。ヤコレお内義隣り長屋へ此

（８７ウ～８８オ欠）

（８８ウ）

低い籾がすぼんだ小豆さいて開らいた。真此様にひたいた開らく仏間の内よりも。姉弟
の子とおぼしくて。羅綾にまとふ異国の姿。稚遊びに移り気の。羨しげに歩
よる。袖を扣ゆる臨海君。お袖はちやつと掛がねをかくと。外には相図と見へ。コリヤ誰か
手車。おちよ殿の手車。招くに連て忍びの武士。怪しや門に窺へは。同しく差足鍔六が。黙
頭近寄。額と額。ヤア貴田氏。推量に違はず。異国の王子。かくまひ有に相違なし。
実否糺せし上からは某踏込二人共いで引捕へて立帰らんアイヤく左にあらず。在所知たる
上なれば。奪ひかへすは何時でも。此侭に差置が取も直さず詮義の糸口。久吉公の上意

（８９オ）

によつて斯迄計ふ主人の厳命。承わつたる此孫兵衛。何角の手筈ぬかりなく。今日
の働き立派共。褒美は跡から早帰れ。イヤ何孫兵衛殿万事は後程後刻〳〵と堀本が
密談しめし両人はいづくともなく歩み行程は三人の。稚同士。お袖が窺ふ表の戸
口。臨海君おとなしく。ノヲ乙の宮　主農君。此日の本へ擒と成。どふ成事と案
ぜしに思ひも寄ず敵の手を。遁れ出しも主の影。三韓へ送り奉らん。夫迄人に

見られなと。夫婦の詞忘りやつたの。夫でもお前と只二人。隠れて居るのは
淋しい。ィェく何ぼ淋しふても。臨海君のおつしやる通り。必ず外へ出なさんなへ。其代
（８９ウ～９０オ欠）
（９０ウ）
りいつもの様に掾明て上ませう。晩景で人の来ぬ内に。海見なさるもお気
晴しと。障子開けば夕日影。淡路嶋招に遠近も。錦をのふる海の面。あつと
合掌臨海君。目に持涙見咎て。ｺレ姉様。お前はいつも暮方に。あつちを
向て泣しやるが。入日は何で悲しいへ。こちやおかしいと手そゝぶり。ｲヤノゥ。入日を
拝むじやないわいの。あなたの空はわしらが故郷。三韓の国有方。ｱノ波のあなたには。
父帝や母上様もおわすらん。嘸やわしらか慕ふ程。したふて泣て居給はん。なつかしの
故郷と打しほるれば打しほれやゝむせび入。給ひしが。そしたらあの海越て行と。父帝や
（９１オ）
母上もおはします。三韓の地へ行れるかや。早ふいにたい逢たいわいのふ。おりやもふ行。ふと訳
なしを夕日まばゆき。磯際に。馳行弟姉姫君。ﾉゥこれあぶない。〳〵とあせれど聞ず。白
波の寄る渚に立足もひたす。計に面の空。慕ひｲむ稚子の思はずがはと水中
にさし引汐と諸共に一反計流るゝにぞ。ｬｱと恟り臨海君。お袖も倶に身をあせり。
ﾉｩ嚊様。〳〵戻つて下さんせ。早ふ助けてたもいのと。二人が叫ふ声限り聞付戻り女房
が。かけ入らんにも戸はしめたり。娘爰明や。〳〵と叩けど内は只うろ〳〵。女力もまさりの一
念。ぐつと押たる両の手に。懸がね折てめり〳〵〳〵。戸よりも先へ馳入て。気も狂乱の立つ
（９１ウ）
居つ。ｺﾚｲﾉｩ娘。こりやまあどふした事ぞいの。此侭にては我夫に。何と言訳成物ぞ。
とやせん方も沖津浪守り詰てぞ居たりしが。ヲ、夫よ。元来我も汐馴し。身はいとわじ
な海士衣。千尋の海は物かはと。上帯解てかいぐ敷。ざんぶと汐に。飛入ば■りは白
玉煙の波。雲の細手にさつ〳〵さ浮ぬ沈みむ。漂ひしが。一心瀬て若宮を。難なく
救ひかき抱き元の汀に立帰れば。嚊様こらへて下さんせ。あの海越と三韓じや
と臨海様のおつしやつたりや。いぬるといふて海端へ。留ても聞す。ｴ、ｴそこ所か。
気付はないかと見廻すも。身は濡鷺の目はとみたり。主農様ｨのふ。〳〵宮様と。呼ど
（９２オ）
いらへも詮方つき。ヲ、夫よ。〳〵と一間にかけ入。携へ出る箱の中。袋に入れし金作り。抜ば
玉ちる希代の名剱。南無大海神。金毘羅様。水難助けたび給へと。戴かすれば
名剱の。光り映じて眼口より。吹出す潮は雰となり。忽砕のさめたる如く。むつくり
起る剱の不思義。ｬｱ宮様〳〵。お腹は痛はいたさぬか。苦しうはござりませぬか。ｨ、ヤ
ねむたい。ねゝさしてと。お浪にいだき付顔も。常に替らぬ其嬉しさ。申嚊様。ﾏﾓﾏｱ
奇妙な其刀。そりやまあ何でござんすへ。ｲヤこりや爺様のと。いわんとせしが。ﾎ、、
是はさつきに鍔六が。忘れていんだ守り刀。大切な刀と聞た故。戴したら今の
（９２ウ）
不思義。どふでも結構な物そふな。ｼﾀｶ常からいふて置のに。そなたがお傍に居
ながらも。なぜ端近ふ出しますといふてくろめる袋の剱。ヲ、嬉しやおしづまつたらﾓｳ■
じや。恐れながらお傍には。臨海君とわたしがお伽人が見へたらﾉｺﾚ娘。わしに必ず
知らしややといひつゝ燃す角行燈火影の夫の浮身をば又も心に案じわび。伴ひ
奥へ入母を。見やるお袖がとつ置つ。けふお座敷での咄しを聞ば。海の中で潮を払ふ不思
義な刀持て居る。其者こそはお尋者。夫が有家を知らせたら。どのよふな科人でも。罪を

赦すとおつしやつた。思へば今のふしぎといひ。主は隣の鍔六め。太刀を證拠に御役所へ。わしが

（９３オ）

訴人にいたならば。爺様のお命は。ヲ、そふじや。〳〵と奥の方。忍ぶ差足振袖になんなく取て

押隠しとしや遅しと走り行。名呉吹送る。裏風に。遠寺の鐘も秋ざれて。いとゞ物

憂永の夜も。幾夜片敷妻お浪奥より出て。独言ほんに浮世はあぢな物。馴染

重た夫に別れ。今の連合藤四郎殿と。夫婦に成たも早五年。忘れ筐のあのお袖。

守育てふと思ふを力。隔た中の心もなく。真実真身大切が。余りもよく〳〵深い縁。思ひ

設けぬ今度の災難。ヨモおめ〳〵と罪に落。犬死抔するあの人ならず。元来大望

有身なれば。縄目は愚。鐵の鎖も苦にせぬ夫の気性。夫気遣ひではなけれども。

（９３ウ）

さはいへ重き殿下の権威。万一言訳立ぬ様なひよんな事やど有まいかと。解た様でも

女気の。胸は幾瀬の物思ひ。誰かは問ん迷ひ道。暗き野畦もいそ〳〵と。褒美と聞に

足も空。戻る我家の門の口。ノウ申嚊様〳〵。爺様の罪も赦され。代官所からもふ追

付。跡から連て行程に。先へいね迚此包。わたしが貰ふた訴人の褒美。ヤア。くく。爺様が戻

らしやんすとは。そりやマア何故どふした訳。どきまぎ合点の行ぬ事。其貰ふ褒

美とは。サア殿様の大事の刀。盗だ者を知らせたら。どんな罪でも助るお触。さつきに隣の

鍔六が。持て来たのと聞た故。ヤアくく。すりや其刀を盗出し。アイ夫を證拠に訴人

（９４オ）

して。爺様の命助けたさ。わたしが持て行ました。ヤアと恟り母お浪。臨海君も驚

に思わず一間出給へは。母は猶しも有にもあられず。エ、是もふ何の事じやいの。知らぬ事

とはいひながら。大切ないあの太刀を。人手に渡して何としよ。こはそもいかに詮方も泣より

いらへなかりしが。ム、何は倶有此包褒美と有は心得ずと。風呂敷取て押開く。内に

いぶせき一つの切首。ヤアと驚き立退しが。能々見れば我夫の。ヤアくくこりやこち

の人藤四郎殿。エ、と気も消へ臨海君。のふ悲しやと泣娘。余りの事に狂気の如く

泣も泣れずあきれ果十方失ふ計なり。ム、扨は娘が訴人の太刀故。事顕われて

（９４ウ）

の此有様。コレお袖。わがみの訴人は手に懸て。親を討たも同し事。浅間しの此御最期。いか

成罰か報ひかと。空しき首にすがり付声も。おしまず歎しが。涙を払ひ女房が。胸

押鎮め抜刀。泣居る娘を一討と。振上る手を留る姉宮。コハそも狂気か何故とす

がり給へは。ヲ、御不審は御尤様子もいわで此有様。子を切親の心の内。狂気はせ

ねど何とマア。本気で是が有られふぞ。義理の親故助けふと。稚心

の一筋な。其孝行も水の泡。斯成果し上からは。切いで是がどふ成ふ。娘を切た其上で

母も跡から死出の道。死んでたも〳〵。命をくれよと振上る剱を覆ふ臨海君。こなたは

（９５オ）

猶も迚まどふ。義理の柵恩愛の楯に隔つる。二瀬川子は汲分て持たる刀。手を持

添へて我と我咽にがはと突立れば。あつと魂消声よりも。母は今更ヲ、でかしやつた〳〵。と誉るも詮なき最期

の

深手。臨海君も諸共に泣ていたわる計なり。のふ嚊様。必ず歎いて下さんな。聞ば聞程爺様の

難義はわしがなした業。エ、思はぬ不孝致しました。せめてお前の云条に。付て死ぬるを

まだしもと。思ふて死だ跡にても。草葉の影の爺様へ詫言をして下さんせ。年の行迄大切

に。孝行せふと思ふたに。愚に生れた心から。逆様事を見せまする。こらへてたべと

いふ声ももろきは。露の玉の緒の。切れてあへなき娘の死骸。母は取付押動かし。エ、モ

（９５ウ）
悲しい事をいふ子やの。何の不孝で有ぞいの。思ひ過しが罪と成。切るゝ身より死ねといふ
母が心を推量仕や。立派な覚悟見るに付そんな心と露しらず。未練と心で呵
つたが。今で思へはいぢらしい。草葉の影へ詫所か。広い世界に又とない孝行者共健気共
いわふ様ない此娘。出かしおつたとこちの人。ｺﾚ。くくくく。たつた一言いわれぬか。因果同士と云
ながら千代もと祈る子を切も義理といふ字は誰書初。浮世の人の心をば鬼になすぞ
と託立涙は千々に浅沢の。菖蒲もわかぬ歎きなり。涙の隙より気を取直し。ﾊｱ
いふて帰らぬ娘の最期。夫の首と諸共に。密に埋両御所を。いでや筑紫の土地近
（９６オ）
成共御供申か未来へ追福。今は仇なれ我夫の。筐は昔の唐装束。せめては首に
取添へて。君の御供と立上り。取出す羅綾唐錦怪しの。衣冠取揃へはかなき頭べ
いだき乗。ｴ、思へば便なき御身の果。多年の本望成就せは。御二方の御供し。此装束
を花々敷。故郷へ供奉する船艤ひ見立まさんと楽しみも。今は甲斐なき手向の
衣。替り果たる姿やと。託ば倶に臨海君。浅はかならぬ藤四郎が情も無足の
此対面。未来は親子も成仏と。取出す香炉。真那盤の深き所縁は故郷も。
すがる欠末の音ならで。遠音に響く責太鼓。とくより門に孫兵衛か。姿は兵具
（９６ウ）
小手脛当て。ｺﾊ心得ずと窺ふお浪。思わず戸口に聞耳立。ﾊﾃ訝しあの貝鐘は両御所の
有家を敵に知せの相図か。何にもせよ。御身の上の気遣はし。主農様ｨの〳〵。と呼はる内も気は
そゞろ。驚く主農臨海君。ｺﾚくお浪。どつちへも往てたもんなやと。取付給ふ左右ヲ、
何のこわい事はござりませぬ。しつと私に取付て。何の〳〵。と云中も膝もわな〳〵うろ付内。
ﾔｱく女房。左程驚く事なかれ。王子の守護は気遣ひなしと。眠るが如き切首の。動く
と見へしが忽に。くはつと見開く瞳の光り。ﾔｱ。そふいふは何所からじや。今のは慥夫の声。
ヲ、外でもない藤四郎成はと。捻向生首女房は。重る仰天姉弟の気も魂しいも添ざりし。
（９７オ）
ヲ、斬罪せられし体に見せ。気を赦させしは破旬の我術。三韓八道の忠臣。備倭将軍伯英か。堅
固の姿見すべきぞと。いふ声共に立上る。綾羅錦繍其侭に。位有て猛き其骨柄。扨はと
思へど三人の。胸晴兼る不審顔。始終の様子最前より。とつくと聞たる貴田孫兵衛。ｿﾚと
かけ声。銘々に。弓と矢つがふ覚の軍卒はら〳〵〳〵と追取巻。ﾊ、、、潢汙潢潦の溜り水
大魚を容る器にあらず。草履掴の素丁稚上り。久吉つれにおもねり諂ふ。加藤が手
下の貴田孫兵衛。蟭螟に等しき下主下郎。射取らん抔とは緩怠千万。我怪術を
心見よと。唱る秘文に取巻軍兵何とか仕けん一同に。平地にのたれ伏たりけり。孫兵衛
（９７ウ）
ふつと吹出し。ﾊ、、、外道の導く邪法の幻術。神力應後の日の本に。仇する異賊の
大罪人迚も叶わぬ尋常に覚悟〳〵と詰懸れば。ﾔｱ穢らはしき叛逆呼はり。大義を思ひ
立とはいへど。我竊盗の類ひにあらず。真柴大領高富久吉。普く四海を平呑し。
猶三韓を掠めんと。大軍所々に乱入す。ｼｬこやつ乱賊匹夫。猥りに無名の軍を弄し。
人をそこのふ国家の仇。我万民の愁ひをさけんと。密に日本へ押渡り折を窺ふ其中
に。玉をのへたる錦城も正清めに乗取れ。王子も彼が擒と成此土に渡り給ふと聞
肺臓をこがす口惜しさ。彼をや先に討んずと。奇術の威徳に忍び入。王子幷に殿下
（９８オ）
の重器早先達て奪ひ取。年月移れど時致ず。態と虜と成つるも。近付撃んず工の

根ざし。盲亀の浮木は今日今宵。住吉社参と聞しより跡をくらます我怪術恨みを晴す
は手裏に有。ハ。、。、悦ばしや嬉しやと。勇み立たる有様は。馬韓弁韓辰韓に其名も高き
伯英か義臣の程ぞ類なき。勇猛はげしき忠心を感しながらもさす敵と。眼を配る
其中に。猶乱調に吹立る貝鐘太鼓鯨波。伯英動ぜずつつ立上り。縦数万騎寄たる
共。霧降隠す■■が術。心安かれコリャく女房。王子二方御供しに船に取乗落延よ。奇計
を以真柴が首。引提預る追付ん。いそおれ早く。ァィくく。間の襖の唐紙を。明て伴ふ両
（９８ウ）
君の。御影見送る伯英は娘の死骸かきいだき。しづ〳〵。折る庭の面。むつくと起立以前の組子。
あますまじとぞ詰懸れど。見向もやらず称名の。声より早く組付を。蹴上るひはら寂滅の。
娘が野辺のいとなみは。此海八劫徳池と変し。弥陀の浄土へ浮めよと。授くる導引
力者共。ともに浪間へ水葬の。お袖が屍見送る名残たるみに四方惣懸り。姿
を隠す伯英が。形は稲妻霧霞。組子は仰天■する孫兵衛。いかなる奇
変の術あつて。空に辺満なす迚も。異賊が目当は本陣ならん。旁々早く
と下知に連。実もと多勢我一に。村立松の住吉へ飛ぶが。ごとくに【三重】駈り行
（９９オ）
第十一
目なき夜半も神燈の星と輝く松林。蟻のはふ迄宮づこの行末も■しん〳〵たる。木の間あいろに窺ひ寄。神
威も何か鮮国の。衣冠に尽す備倭将軍眼を配て忍び来る。前後に囲の■祝が神衣の下に小手脛当。不
意に捕んず手筈を定め。捕たと■より組付を。振ほどひて鷲掴み。はつし〳〵と投付る。所を透さず入替り。向
ふ
黙りの入身をほぐし。打付られてころ〳〵〳〵。ころばかす禰宜砂まぶれ。一頬をかゝへて逃て行次に三番手垂
の力
者。我組留んとむしやぶり付。ハ、逋己はおこのやつ。組上手よと嘲笑ひ。腮に手をかけ一しやくり。首引抜て捨
たりけり。跡は長柄の惣懸り右往左往に突懸れど多勢を屈せぬ伯英が殿ふる秘文に数多の捕手。
（９９ウ）
切共突共霧霞。ねぐらを失ふ村鳥の羽■る如く皆ちり〳〵。■武者なれ共社稷の仇。皆殺しぞと振かざす向ふへ
貴田が駈ふさがり。ャァ御座の間近く緩怠千万。貴田が手並を見せんずと。詰より詰寄龍虎の。いどみ。何国よりか
は
射たりけん矢一つ来て伯英が。冠を丁と射削て馬手の古木に立たりける。ャァ我一人を捕へん迚けふ〜敷囲と云。
比興
至極の飛■る。頬を出せよと位丈高。名のみ聞て対面は今を始。真柴大領久吉見参せんと声諸共厳然
として路楽の調べ。今ぞ十善帝王の。太師の衣冠うや〳〵敷立出給ふ久吉公ャヲレ伯英。和韓両朝切従へ万機
を補佐する此久吉。汝ごときの小敵一人。大軍を以て囲んや愚々。既に名釼手に入上邪法とは知たれ共。
死罪なせしは掟の表今又加藤が。射かけしこそ改て反賊伯英幻術をくづかん為。神力應護の大悲の鏑矢。態と
（１００オ）
正鵠を違しは。勇士を惜む我寸志。最前貴田が残せし刀は。大明より朝鮮へ預置たる護国の銘釼。返せし心は二
人の王子助くる
といふ知せの謎。多勢を以て囲しは囲にあらず守護なさしむ。ソレ供奉せよの下知の下。加藤小西に傅れ出させ
給ふ御両君ャョ伯
英が案ぜしと。おとなしやかに御弟宮。こちや三韓へ逝るはと嬉し笑顔の主農君。主君の無事を見るに付。肝に
こた
ゆる真柴が情さばかり猛き伯英が。英気塞てどふど座し涙肌骨を。しぼりしが。ㇾェ口惜や残念や。久吉が首

提ずんば三韓の地は踏まじと。誓ひて国を出来し伯英。故国に背き日本の情になびく義有んや。我存命て有ならば
六十余州に人種は置間敷に。王子二人を帰すにめんじ討死するがうぬらへ情。死首取て末代の。手柄にせよと抜刀。
逆手に取て我と我首に押当るゑい〳〵〳〵。るゑい此日本神国の地を踏者は悉忠孝。義臣の名を挙る国の誉ぞいちじるし。
（１００ウ）
かゝる所へ常盤之助。犬■■■を括上御前に駈来り。仰に随ひ佞人原引捕て糾明せしが。罪を悔て北条氏政。森尾高山
に至る迄。以■忠勤励んと降参にまかせ命は助け候也重々憎ひ此両人御前に■て刑罰と氷もたまらず首打落し。逆賊
佞人皆亡ひ。凱歌上る時津風。枝をならさぬ御代の春栄る国こそ久しけれ

天明七載丁未臘月廿三日　作者　若竹笛躬　丹青堂